
Colorful

須王瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Colorful

【ノード】

N4333M

【作者名】

須王瑠璃

【あらすじ】

龍に守護された五大陸。

舞台は水龍が守護するイア大陸の、ある王宮。

そこを使える侍女・ルシア。彼女はいたつて平和に過ごしたいのに、周りが放つておいてくれない。

ルシアを溺愛する美形王子に、愛に生きる王女。暴走護衛に嘘つき護衛。

そんな人達に囲まれた彼女の平凡(?)で色とりどりな日常小話。

「王子様とのラブロマンス？滅相もございませんわ！」

ラブコメディを用意します！今のところどうなるのかわからぬけれどR15指定しておきます。だって王子が・・・。連作っぽい作りになつております。

問題五 (前書き)

御覧下さりありがとうございます。
初めて小説を投稿してみました。
お気に召しましたら幸いです。
それでは、どうぞ。

春もううららか。生い茂る木々の緑の隙間からこぼれ落ちる暖かな陽光が気持ちよく、心地よい眠気を誘つような午後のこと。

「あの、腕を貸してはくだせらないでしょうか……？」
「なぜ？」

恐る恐る相手の機嫌を伺つような聲音と、それに対照的に相手の反応を面白がるような聲音。人気のない図書室に響く少女の声と少年の声。

「あの、あの……私、別にお仕事もござりますし、それからお暇しませんと……」
「僕の相手も立派な仕事の内の一つだと思つげど？」
「え？！いえ、そんな！滅相もございません！私なんてそんな！」
「昔は一緒に遊んだじやない」
「それは小さい頃の話で……」

今はそんな無邪気な事が出来る年齢ではないのです！…わかつてくださいませ！

終わることのない押し問答に、少女は泣きたくなつた。

少女は壁を背にして立つていて、その両側を少年の腕によつて囲われていた。少女の体に触れるか触れないかの微妙な距離で壁に手をつかれているものだから、少女は動きたくても動くことができずにいる。斜め上でかがみこむように顔を寄せている少年の方を真つ直ぐに見ることもできず、彼女はひたすら視線をそらして俯くことができなかつた。

それが気に入らないらしい少年は、俯く彼女の耳元に唇を寄せて吐息とともに囁く。

「ねえ・・・ルシア・・・?」

ルシアと呼ばれた少女は面白いくらい体を揺らすと、硬直しながら細い声で答えた。

「は・・・はい」

「仕事と僕と、どっちが大事なのかな?」

そのお言葉は、仕事を理由に疎遠になつてている夫に向かつて寂しい妻が問い合わせるものではないのですか!!

心の中で絶叫しつつ、ルシアはフルフルと首を左右に振るだけで答えない。答えられるはずもない。ここで仕事が大事だと言えば、角がたつし、かといって目の前の少年の方が大事だと答えれば、なにやらわが身に危険が迫るような気がするのである。

ああ・・・どうしてこんな事に・・・。私はただ図書室のお掃除を言い付かつただけなのに。

につちもさつちもいかず、少女はただただ足下を見つめ、この場面をどうやってやり過ごすか、あるいは誰かが救いの手を差し伸べてはくれないだろ?かと、淡い期待を抱くのであった。

* * *

ルシア・ガーラント。

それが彼女の名前である。

水龍が守護する 水の楽園 イア大陸では一般的な栗色の髪と翡翠色の瞳を持つた小柄な少女だ。肩の下あたりで揃えられた柔らかな髪が、彼女の少し丸い顔の輪郭をふんわりと包み込み、アーモンド型の瞳は瞳孔が大きく、まるで子犬のような印象を見るものに与える。少し厚めのふつくらとした唇が、更に愛らしさを添えていた。美人とはいいかないまでも、十分可愛らしいといつて差し支えない少女である。

彼女は、イア大陸で一番大きな国家であるランディスの王宮に、十歳の頃から侍女として勤めている。

ルシアの家は平民ではあるが、昔の大戦で曾々祖父が立てた武勲によつてランディス王の覚えがめでたく、また彼女の兄であるトルア・ガーラントが最年少で王族の近衛騎士になつた為に、働き場所としては願つてもない花形職である、王宮付きの侍女という仕事を得る事ができた。

王宮付きの侍女という職は、身近に上級貴族や王族達と触れ合える上に、最上級の教育を受けられるということで、大変な人気職となつており、その倍率はかなり高い。

また上流貴族の目に留まることができれば、それ相応の豊かさを得ることができ。これには本人だけではなく、娘達の親達も大きな期待を寄せていて、それがまた競争率の高さに拍車をかけている理由でもあつた。

そんな人気の侍女職についてから早六年。

住み込みの為、最初は優しい両親と、賢く強い兄や可愛い妹と離れた事によつて寂しさを感じていたものだが、今では多少の失敗はあるものの、ルシアも立派に仕事をこなせるようになつた。

まだ若い彼女には大きな仕事は任せてもられないけれど、どんな小さな仕事でも完璧にやり遂げて、コツコツと経験を積んでいこうと目標を掲げている。

だというのに。

「ねえ、ルシア。答えて？」

目の前の少年は、「ことある」とにルシアの邪魔をしてくるのだ。襟足まで伸びた艶やかな黒髪、陶器のような滑らかな肌に、形よく整った鼻と唇が、絶妙なバランスで配置されている。二重の瞼と、けぶるような長い睫に縁取られた瞳は吸い込まれそうな深海の青。見ているだけでうつとりするような、けれど心のどこかでその魅了の力を恐ろしく感じるような美貌の少年。

彼の名はラーグ・ウル・イリュデシア・ランディス。

その美貌で名高いランディス国第三王子その人である。

「！」・・・困ります！本当に本当に困ります！

ルシアが泣きそうになりながら、一生懸命言っているのにラーグは意に介した風もなく、忍びやかに笑うだけ。

いつも彼は、ルシアが困っている様子を見ては楽しそうに笑う。ルシアだって純情な乙女の一人である。およそ本当に同じ人間なんかと思うほどの王子の美貌を間近にし、その甘い瞳と魅惑的な声で囁かれれば、心臓はドキドキするし顔だつて真っ赤になってしまう。そんなルシアの反応が、王子にとつては楽しくて仕方ないらしい。

これはもう絶対にイジメだと思います！どうして私ばかりなのですか！

言いたい事は山ほどあれど、王族に逆らえるはずもなく、ルシアは心の声で文句を言い募るしかない。もつとも、ラーグの顔を真正面から見る勇気もないのだから、彼が王族でなかつたとしても、言い返せせるわけがなかつたが。

「何が困るの？簡単な質問じゃない」

「」とセラルシアの耳元に唇を近づけて優しく囁く声は、ルシアと一つしか年が違わないとは思えぬほどに色気がにじんでいる。

「ああ・・・その色気を少しでもいいから分けてくださいまし・・・・・じゃなくて！こんなところで振りまかないで下さいませ！」

声には出せない分、ルシアの思考も相当な混乱の域に達していた。

「ラ・・・ラーグ様・・・」

「君は、僕の事をどう思つているの？」

いつまでたつても固まつたままのルシアに業を煮やして、ラーグは彼女の瞳と目を合わせるべく、いつそつかがみこむ。彼の手がそつと頬によせられて、ルシアはギュッと目を瞑つた。そうすれば彼のあの瞳を見なくても数むからだ。あの深い青の瞳を、ルシアは見てはいけないので。

「ルシア・・・」

ラーグの囁く声が聞こえて、吐息が唇に・・・。

その時である。

ガチャガチャツ！ガツツ！バターン

突如、静かな部屋に響き渡るけたたましい音。そして・・・。

問題五（後書き）

御覧ください、ありがとうございました！
よろしければ、続きを読むと嬉しいです

暴走イーシャ

「ラーグ様！」こんなところで何をしていらっしゃるのですか！

図書室に勢いよく飛び込んでくる闖入者。肩までの褐色の髪を後ろで一つに束ね、薄い緑の瞳に怒気をにじませた少年が、勢いよく靴音を響かせ、早足で一人に近づいていく。

目じりが下がっていて、本来なら温和な雰囲気を醸し出す少年だったが、今は般若もかくやといつぱりに怒りでいる。

「会議はとっくの昔に始まっているのですよ……」こんな所で油を売つている暇などありません！

彼はラーグに向かってまくしたてると、ラーグの肩に手をかけて、ルシアから引き離す。

た・・・助かりました・・・。

と、ようやくとラーグが離れてくれて、ホッと安堵の息をつくルシアであったが、彼女から引き離されたラーグは、その美しい眉をよせて不満気だ。

「イーシャ、何故邪魔をするんだ？もう少しだったのに

先ほどままでどうしてかわって、冷たい声。だがイーシャと呼ばれた少年は、そんなことには歯牙にもかけずラーグを睨みつけ、彼に負けず劣らずの冷えた声で言つ。

「何故とおっしゃいますか。何故と。だったら、私だってお聞きし

たいものですね！何故貴方は大事な会議が始まっているところ、こんな場所にいらっしゃるのでしょうか？！」

イーシャは、その細身の体が倍以上に膨れ上がったのではないか、と思わせるほどの大オーラを放っている。

「イ・・・イーシャ様。あの、その・・・」

そのオーラに竦みあがつてしまつたルシアが、恐る恐るイーシャへと声をかけると、

「いえ、ルシアに罪はありません。わかっています。大丈夫ですか
らね」

彼は打つて変わつてルシアに優しく微笑んでくれた。そして再びラーグを睨みつける。

「何故ここにいるつて？ルシアがいるからに決まつてているじゃないか。大体会議に出席しろとか横暴だと思わない？一つの議題に、延々と無駄に討論し続けるだけなんだからわ。

どうせなら賛成・反対双方の意見をまとめたものを提出してくれればいいよ。僕はそれで十分判断できる」

「貴方が判断できたとしても、周りが納得しません。会議とはそれぞれの意見をぶつけ合つて、互いの考えを理解していくものなのですから」

「だから、その理解とやらは僕がいなくてもできるでしょ？むかく
るしいオジサン達の中にいるよつも、こいつやつてルシアと一緒にいる方が、何万倍も楽しい」

ね？トルシアに麗しい微笑みを送るラーグ。更に跳ね上がるイーシ

ヤの不機嫌度。ルシアは引きつった笑みを浮かべ、心中で狼狽していた。

大変です！イーシャ様のレベル一です！

その時彼女は、救いの主に思えた彼が、絶対の破壊者に変貌しつつあることを察したのである。

* * *

イーシャ・ディキンスは、ラーグの付の補佐官であると同時に上級魔術師として王子の護衛も勤めている程の有能な人物であり、その性格は至極真面目で善良だ。

しかし、その普段は穏やかで優しい彼を唯一激怒させることができるのが、この第三王子なのである。

ラーグの執務に対する態度は一貫して不真面目だ。面倒がって、イーシャに仕事を押し付けて逃亡することは、王宮内でも有名な話となっている。

ラーグと違つて生真面目なイーシャは、いつも相当な苦労を強いられており、ことラーグの執務態度となると、人が変わつたように厳しくなる。

それはもう恐ろしいまでに。

その彼の怒りのほどを、王宮の人々はレベル一～三で表している。

レベル一は、まだそれほどの脅威ではないが、注意の必要がある。

レベル一だと防御魔法を唱えつつ逃げ道を確保する必要性があるが、まだこちらの話を聞く耳を持つてゐる分マシだ。

そして最後のレベル三になると、それはもうすぐそこから離脱しなければならない。

もしくは彼と同じ上級魔術師一・二人で一斉に拘束魔法を唱え、彼の動きを完璧に止めるかである。

宥めようなどと考えてはいけない。

もはやイーシャは言葉が通じる状態ではないからだ。

鬼なのだ。悪魔なのだ。

五年前、勉強を嫌がつて逃走したラーグに対し、堪忍袋の緒が切れたイーシャが一度このレベル三に到達したことがある。その時は、ラーグが逃げ込んだ王宮の裏手にある森の一部がぽつかりとなくなってしまった。

当のラーグは、涼しい顔で防御魔法をはり、その場に居合わせたルシアも守ってくれたが、あんな日には一度と合いたくない。本気で死ぬと思つた恐ろしい思い出だ。

それから王宮の人々は彼の怒りをレベルで表し、暴走が起こらないよう注意しているのだった。

中でも、実際死ぬ目に合わされたルシアは、そのレベルを推し量ることにはぬきんでている。自分の命がかかっているのであるから、当然ではあるが。

そして恐ろしいことに今、目の前にいるイーシャは確実にレベル一だ。

すぐさま逃げ出したい。

しかし、ここで彼女が何とかしないと納まりがつかないという事も、ルシアは今までの経験から十分に学習していた。

「ラ、ラーグ様？」

精一杯気力を振り絞つて、なるべく明るい笑顔になるよう心がける。心中は真っ青ではあるが。

「何？ルシア」

「あの、わ、私、お仕事を頑張っている殿方って、とっても素敵だと思います」

「・・・・・」

「しつかり、お仕事をこなされている方って、輝いて見えますもの。憧れてしまいますわ」

「・・・・・」

「お、思わず、お慕いしそうになってしまいました」

じつとこちらを凝視するラーグの視線に負けしそうになりながら、ルシアはなんとか笑顔を保ちつつ言い切った。

「・・・慕う？」

それまで黙っていたラーグが、ぼそりと呟いた。

「は、はい」

ルシアが肯定した瞬間、ラーグは彼女の手をとり、その甲へ口付けた。

「『めんね、ルシア。君と過ごしたいのは山々なんだけど、僕には仕事があるんだ。終わったら、またすぐに会ってに行くから、寂しいだろうけど少しの間だけ我慢してね』

そして先程までとはうつてかわって真面目な表情になると、凛とした声でそう告げた。

「いいえ。どうぞルシアの事など一切口財構わず、お仕事を頑張つてくださいませ。ルシアも遠くで応援しておりますから」

「いらっしゃらなくて結構です！」

とは言えないルシアは、笑顔をひきつらせながら、一部本音を交えつつ見送りの言葉を送る。 そんなルシアに、とう

けるような笑顔を見せてから、ラーグは優雅に立ち上がり、

「イーシャー何をしてる！仕事だ！会議に行くぞ！」

そうイーシャに言葉をかけると、彼の返事を待たずにそのままの勢いで図書室をでていってしまった。

その変わり身の早さと、一方的に投げつけられた言葉に、イーシャは毒気を抜かれたように深い溜息をつくが、ラーグがやる気をだしてくれたのであれば彼に否はない。

「ルシア、ありがとうございます。いつもすいませんね」

ルシアは疲れた顔をしながら、いいえと首を振る。

「あのね、ルシア」

遠慮がちにかけられる言葉に、ルシアは次の言葉を予想して鉄壁の笑顔を作り上げた。

「なんでしょうか？イーシャ様」
「いつのこと執務室にルシアを待機させておけばいいんじゃないかなって思うのだけれど・・・」

この言葉は、ラグ絡みで何かあつた際に毎回問い合わせられる言葉だ。

それだけイーシャもあの王子の扱いに困り果てているのだろうが、ルシアだってそんな面倒を見るのは嫌なのである。

「謹んで」辞退させて頂きます
「でしょうな。うん、わかつていますかい。うん。じゃ、本当にありますといひやります」

図書室の掃除をしに来ただけなのに、どうしてこんなにも疲労せねばならないのか。ルシアは世の無常を感じながら、少し残念そうに去つていいくイーシャに一礼して、その姿を見送った。

暴走イーシャ（後書き）

御覧下さりありがとうございます！

王子さまは、ルシアに夢中でござりますw
えーと、色々とテキる子なんですが、この時点だとただのおバカ
さんにしか見えませんねw

嘘つきティルガ

「まあ！またお兄様がそんなことを？」

図書室での話をルシアから聞くと、部屋の主は可憐い声を尖らせた。

部屋の主は、ラナスフィア・ウル・イリュテシア・ランティス。

第一王女であり、母親を同じくするラーグの妹である。

母親譲りの眩い金髪を腰まで流し、魅力的に輝く大きな翡翠の瞳と甘く潤む桃色の唇は、見るものを魅了してやまらず、立ち居振る舞いも気品あふれる華やかなこの少女の美しさは、兄と同様に大陸中に轟きわたる勢いである。

4兄弟の末であり、王を始めとして兄弟全員から溺愛されている愛らしい妹姫は、ルシアにとつては多少我儘などもあるが、すぐ上の兄であるラーグよりはよっぽど常識ある人間だ。

ルシアは年が同じだということで、幼い頃に遊び相手を務め、王女が彼女を気に入ってくれたこと也有って今では彼女付の侍女として仕えている。

「ええ。お仕事をしてくださらないとイーシャ様がお嘆きになつておられました」

王女にお茶をさしだしながら、ルシアは苦笑する。

「ありがとう。全く。わたくしのイーシャに迷惑をかけるなんて。本当、どうしてさしあげようかしら」

受け取つたお茶を一口飲んで、ラナスフィアは頬を膨らませると、それに同意するように声が上がつた。

「是非、リテロに飛ばしてしまいましょう」

そう言つたのは、ルシアではない。それまで王女の後ろに控えていた男性が声を発したのだ。

「他大陸じゃないですか」

「いくらなんでも、他大陸まで飛ばすほどだらつかとルシアは首をかしげる。

「リテロには昔から、仕事をしない人に対する訓練所というものが

あるのです。

それはもう恐ろしいほど厳しい訓練だと評判なのですよ。それを受けて帰つてきた急け者達は、皆一様に全うな仕事人間として更生されていいるのです。もう三度の飯よりも仕事が好きという人種になるんだとか

「すごいですね！そんな施設があるなんて！」

「あそこは実力主義ですからね。働かざる者、食いつべからずといつ

わけですよ」

イア大陸の隣に位置するリテロ大陸は、地龍が守護する実りの大陵だ。守護のおかげで、いつでも温暖な気候を保つていてるその大陸の人々は、おおらかなんのんびりとした気性をしている。

しかし、そんな気性の裏で、そのような厳しい施設を常設しているとは意外としか言えない。

「ね、すごいですよね、姫様」

感心してキラキラとした瞳を向けてくるルシアに、ずっと黙つて話を聞いていた王女は一瞬可哀想なものを見る目を向けてから、背後

に控える男を睨みつけた。そして、一言。

「嘘でしょ？」「

「はい」「

「へ？」「

王女に睨みつけられても平然としながら言葉を返す男を見て、氣の抜けた声を上げたルシアは、意味を解すると猛然と男を睨みつけた。

「また嘘なんですか！ティルガ様！酷いです！」

「またとはなんですか。失礼ですね。この前言つたのは出鱈田ですよ」

「同じですよ！」

男は褐色の髪をかきあげ、薄い緑の瞳に小馬鹿にするよつた色をこじませて、ルシアを見やる。

その顔は、イーシャとそっくりではあるが穏やかな雰囲気のイーシャとはまとう雰囲気が全く違う為、一見似ているよつには思えない。

「騙される方も騙される方なのですよ～ルシア嬢はいつも単純でいけない」

「イーシャ様に訴えますよ？」

「俺が悪かったです。すいません」

* * *

ティルガ・ディキンス。

イーシャ・ディキンスの双子の弟で、武術に秀でた才能をもち、そ

の道では逸材であると評判の男だ。

武術だけではなく弁舌にも長けた有能な人物である彼は、王女の護衛として三年前から常に側に控えている。

しかしながら、その性格は温厚な兄のイーシャとは違い、大いに問題がある。

このティルガという男。嘘をつく事を趣味としているのである。それは他愛のない嘘や作り事めいた事がほとんどであるのだが、時折ひどく信憑性の高い嘘をつくから厄介なのだ。そして、そんな彼の手綱をとることができるのは、兄のイーシャだけという有様。もつとも幼い頃から一緒にいる王女も彼の相手は慣れたもので、イーシャの次くらいに彼の扱いには長けていていると自負している。

しかし、よく言えば素直、悪く言えば単純なルシアは、王女と同じように幼い頃から慣れ親しんでいる間柄であるにも関わらず、それこそ毎回といって言いほどにその嘘に騙されてしまう。

なまじティルガがイーシャと同じくらいに博学であるといつ事を知っているものだから、余計に騙されてしまいのだとルシアは言うが、毎回同じように騙されている姿を見ている王女としては、学習能力はないのだろうかと呆れるばかりである。

「ルシア、いい加減ティルガの言つ事は八割が嘘だという事を学習なさいな」

王女は大きく溜息をつく。その言葉に、ルシアはしょんぼりするが、ティルガは聞き捨てならないとばかりに反論する。

「ラナスフィア様、それはあんまりなお言葉です」

「あら? どこが不満なのかしら?」

「俺の言葉は、七割が嘘、一割が悪ふざけ、もう一割がお茶目、最後の一割が真実なのでござります」

「真実は一割だけなんですか? ! ティルガ様? !」

「・・・・・。そんな細かい事はビリでもよひしー」

「重要な事ですのに」

「なんだか、無性にイーシャを側に呼びたくなつてきたわね」

「申し訳ござりません。悔い改めます」

結局のところ、兄に弱いティルガは、大抵の事ならイーシャの名前さえだせば大人しくなる。

同じように問題を起こすラーグとは違つて、毎回騙されてしまうとはいえ、ルシアにとつては扱いにくい相手ではない。ラーグの場合は、ティルガに対するイーシャのようになりつづけとを聞かせられる相手がないのが問題なのだ。

ルシアはポンポンと言葉を投げあう王女と護衛の為に、お茶のお代わりを用意しながら、そう考える。

そして、今度こそは騙されませんからーと、もう幾度となく誓つた誓いを繰り返すのだった。

嘘つきテイルガ（後書き）

後書き　お読みくださりありがとうございます
なにやらお気に入り登録もしてもらえて嬉しいです。
登録してくださった方、ありがとうございます

本人達はいたつて本気

「こつその事、お前トイーシャを取り替えてしまえばいいと思つうのだけれど、どうかしら？」

「俺とラーグ様では、よりいつそう問題が増えるだけと存じます」

「お前ね、そんなに自分をわかつていてるなら、どうして改めようとは思わないの」

「これが俺の個性ですから」

「そんな個性、どこかに捨ててらっしゃい！ わたくしはイーシャがいいの！」

「そこをなんとか。同じ顔ですし、ほら」

「うつ！ 顔を近づけないでちょうどいい！」

「ほら、この顔はお好きでしょ？ そんなに顔を染められて… たまらないのでしょうか？」

「…すいません、お一方。なんだかいがわしいので、止めて頂けますか？」

* * *

ラナスフィア王女のイーシャ好きっぷりは、ラーグのサボリ癖やイーシャの暴走と同じくらいに有名な話だ。

幼い頃からイーシャにべつたりだつた王女は、ディキンスの双子がそれぞれの護衛となつて三年経つた今でもイーシャが兄付であることに不満を訴え続けている。

それは勿論、ティルガに問題…は若干とはいえないくらいにあるが、不満があるわけではない。

好きな人についても側について欲しいと思うのは、恋する少女にとって

て自明の理である。

ラーグとラナスフィア兄妹に専用の護衛が定められたのは、三年前のことである。

当然のことながら、専用の護衛をつけるという話になつた際、王女は強くイーシャを望んだのだが、一人娘の関心をこれ以上買われてはたまらないと王が採用しなかつた。

そしてこれもまた当然のことながら、可愛い娘の不興を買つた。

それはもう、恐ろしいほどに。

怒り心頭に達した王女は容赦がなかつた。

基本、王と顔を合わせない為に部屋からでない。王に呼び出されても、王の前では絶対に笑わない。その上、道端に転がっている石を見るような目と絶対零度の声。

誰がどりなそと、王女は頑なに王を拒み続けた。そのどりなした相手が、イーシャであつてもだ。

可愛い可愛い、それこそ目にいれても痛くないほどに可愛いがつている娘に、そのような態度を取られてしまつた王は、多大なダメージを受けた。王妃と側室達が宥めても、王の嘆きは深く、とうとう床に伏してしまつまでになつた。

それでも、王女は断固とした態度を取り続けた。

「もう、じつなれば意地の張り合いですわ」

そう言って、ルシアを伴つて王の見舞いに訪れた王女の言葉と、あの笑顔をルシアはけして忘れない。

「まあ。お父様。こんなに顔色をお悪くなさつて。大変でしたでしょう?」

見舞いに訪れた娘の姿と、その慈愛溢れる言葉に「許してくれるのか」と王は、ほのかに元気を取り戻したかに見えた。しかし。

「たかが娘の態度」ときで、ご心痛になるなんて、よつぽどお体が弱つてらつしやるのですわ。皆も気がかりに思つております。どうでしょう？お兄様方も、成人の儀を済ませられましたし、早くご譲位あそばしたらいかが？

そうですわ！ いつそのこと環境の良い場所に移住なさつてはじうでしう？ 人里離れた環境の良い場所でお過ごしになられたら、きっとお元気になれますわ。

お父様がお元気になられますのを、わたくし遠くから祈つておりますから」

王女は、それはそれは美しく愛情溢れる笑顔で、そう言つた。

それはもう花が咲き誇るよつて、華やかな笑顔で。

王女の一步後ろで控えていたルシアは真つ青になつて固まつてしまつた。素晴らしい笑顔と可愛らしい声に彩られた刺々しい言葉のその意味に。

譲位を促すなど、実の娘であつたとしてもあつてはならないもの。しかし彼女の華のような笑顔とその後ろに漂うドス黒いオーラを前にして、彼女を責められる強者などこの場にはいなかつた。

後ろにいたルシアが固まつたくらいだから、それを真正面から受け止めた王は顔色の悪さを更に増して、言葉もでない有様。

「・・・ひ、姫様つたら、そんなにご心配になつておられたなんですねーこれはもう陛下には是非とも、お元気になつていただかなくてはーええ、是非ここでー陛下にはーお元気いー」

誰も言葉を発すことができないほどに一気に低下した部屋の温度をあげるべく、ルシアは頑張った。

本来なら陛下の御前でなんの許しもなく発言してはいけないのだが、それを忘れてルシアは頑張った。

王女の言葉を塗り替えるべく、「陛下」と「元氣」と「リリード」という事を精一杯主張した。

おかげで、からうじて部屋の空氣が温まつたものの、王女は鉄壁の笑顔を守り続けた。

そう、この時点では王女が有利であるかに思えたのだ。王はもう瀕死の状態であつたし、王女の態度は頑なであった。後もう一押しすれば王はその膝を屈するであろうと、誰もがそう考えるほどにこの父娘喧嘩の勝敗は明らかだつた。

しかし、神は王をお見捨てにはならなかつたのである。

不毛な父娘喧嘩の勝敗の鍵は、やはりイーシャ・ディキンスが握つていた。

* * *

「ラナスフィア様は、いらっしゃいますか？」

その日突然、王女の部屋にイーシャがやってきた。

普段であれば、失礼にならないよう来訪の際には事前に連絡をよこしておかなければならぬ。それまでイーシャがその連絡を忘れたことなどなかつたのに、その日だけは違つた。

王女への取次ぎをしながら、その事に思い至つたルシアは、イーシャの来訪の意味を察して溜息がでそうになるのを飲み込んだ。

「まあ！イーシャ、突然どうしたの？」

恋する相手の突然の訪問を、王女は喜んで出迎えた。眩いばかりに輝く笑顔は、どの男も虜にする程の力を持つていた。この時の相手が、イーシャ・ディキンスでなければ。

「ラナスファイア様には」機嫌麗しく

急な来訪を詫びるでもなく、彼は王女に優雅に礼をして王女を蕩かすような笑顔を顔に浮かべた。この時点でルシアはすぐに逃げ出せるように静かに入り口へとじり寄る。

「早速ですが、先日の陛下へのお見舞いの件でお話が・・・」

イーシャの言葉を聞いて、王女は瞬時に固まつた。あの王の見舞いの時とは全く逆であった。

イーシャは眞面目で王家に忠実な男である。とりわけ王には、引き立ててもらつた恩義を感じているらしく、常に誰よりも忠実であるとしている。王女が護衛の件で騒いだ時にも、「王がお決めになつたことですから」と懇々と諭し、それが余計に王女の瘤に障り彼女の態度をより頑なにさせたわけだが、お見舞いの件に関しては明らかに王女の分が悪かつた。

「陛下に譲位をお勧めになつたとか？」

「な・・・なんのことかしら？」

「誤魔化しになられませぬよう。私は信頼できる方に教えていただいたのですよ」

「誰かしら？そんな戯言を・・・」

「どなたでも結構です！ラナスファイア様！実の父上様になんということをおっしゃられるのですか！」

往生際悪く逃げようと試みる王女に、彼はそれはそれは怖い顔で詰め寄り、ガミガミとお説教を始める。

ラーグ相手でなければ、いくら怒っていてもイーシャの暴走は始まらない事をルシアは知っているので、その火がこちらに飛び火しないよう、こつそりとその部屋を出たのだった。

* * *

こうして専属護衛にまつわる戦いは、王女の敗北で終止符を打たれた。当初の予定通り、イーシャはラーグの護衛に。ティルガはラナスフィアの護衛に。王女だけが未だに不満をもらしているが、この振り分けがもつとも適したものであつたと誰もが思っている。もしラーグの護衛がイーシャでなければ・・・と考えるだけで、ルシアは背筋が凍る思いがする。

そして、三年前の自分の判断が間違つていなかつたことを、一人こつそりと胸の内で噛みしめるのであった。

本人達はいたつて本氣（後書き）

お読みくださいありがとうございます！

イーシャは王女に対するジョーカー扱いです。

この日の為に、王はイーシャに目をかけていたのです！（嘘）

「これでも仲良し

「あら、お兄様」

ラナスフィア王女が、ティルガを連れて廊下を歩いていると、すぐ上の兄であるラーグが進行方向から歩いて来た。それを見て、王女は足を止め兄に向かつて優雅に腰を折つて礼をする。

「イーシャはどうですの?」

「フィア・・・開口一番それってどうなの?」

呆れたように見てくる兄を見やつて、王女は可愛らしく小首をかしげてから

「御機嫌よう。ラーグお兄様。それでイーシャは一緒ではないの?」

見事な棒読みでそう言つた。

「もういいよ・・・僕が悪かった。イーシャは一緒にないよ。書類を父上の所に渡しに行つている

「そうですの・・・」

妹の気持ちは十分に知つてゐるので、ラーグは酷く残念そうに頃垂れる妹の頭を慰めるようになれる。

妹と同じように、首をかすかにかしげながら問つてくる兄の聞きたいことなどわかりきつていて、

「僕も聞いていい?」

つまりは似たもの兄弟。

王女の後ろに控えているティルガは内心で、そう思ったが口を開くことはなかつた。

「残念ながらルシアならいませんよ。わたくしがこれから図書室に参りますので、その準備に向かっておりますから」

「そんなのティルガにやらせなよ」

望む答えが得られなかつたラーグは慄然として、ティルガを軽く睨みつける。

「恐れながらラーグ様。俺は護衛ですので、ラナスファイア様のお側におりませんと」

王子に睨まれてもなんのその。涼しい顔をして姿勢を崩さないティルガに、ラーグはムツとしたような顔をする。

「今現在、ルシアが暴漢に襲われていたら、一体どうするの？」

「いえ、一国の王女殿下と一介の侍女の立場を比べると申されましても」

「何？ルシアは大事じゃないって言うの？死にたいんだ？」

その尖つた声と、辺りに漂いだした冷氣に、近くにいた人々がぎよつとした顔を向けるが、王女が「なんでもないのです。気にしないでちょうどいい」と伝えると、ほつとしたように、しかしそれでも足早に離れていく。

「死にたいか死にたくないかと聞かれましたら、それはもう力一杯全力で死にたくない！」と申し上げます。けれど、ルシア嬢が大事であると申しましても殺る気満々でございましょう？」

「それもそうだね。確かに大事だと言われても腹が立つかな。うん、残念。どっちにしてもお前は死罪つてことだね」

「身に覚えのない罪で死ぬのは、いささか理不尽ではないでしょうか？」

「そんなのルシアがいなくて傷ついた僕の心を慰めると思えば、軽いものじゃない？」

睨み合「う男」一人。ティルガは、ふうっとこれみよがしに溜息をつくと、遠くを見つめる目つきになりながら、静かに呟いた。

「古今東西、昔の人々はおっしゃいました。主君に忠義して死を受け入れるか、主君を暗殺して国を乗っ取るか・・・。非常に残念です。俺はラーグ様のことは気に入つておりましたのに。兄の次くらいに」

それを受けて、ラーグもにっこりと微笑む。

「うん、僕も残念だよ。僕もお前の事は気に入つていたし。ルシアの何億分の一かくらいには。あ、後、僕を暗殺しても国乗っ取れないから。まだ上に一人いるからね。是非、頑張つて」

力チャヤと、お互いの腰の獲物に手を伸ばす一人の頭に向けて、その時、白い纖手が振り下ろされた。

「いい加減になさいませ！」

がつん！と小気味いい音とともに、振り下ろされる拳。それは非力な姫君とは思えないほどの大、体重のかかつた重い拳であった。

「黙つて聞いていましたら、延々とくだらないことを！お兄様、ルシアがいないからってティルガに絡むのはお止め下さいませ！ティルガも、こんな時ばかり律儀に返さなくてよろしい！大体そんな物騒な言葉を残した古人はいません！」

どこまで会話がころがつていくのかと様子を見ていれば、こんなとこで剣を抜こうとするとはなんたること！…とラナスフイアは一息に怒鳴つて息を荒げている。が、しかし。

「…」

「いや、俺の存在意義をなくさないでくださいよ。ラナスフイア様はそうおっしゃいますけど、絶対考えた奴いると思つのですけどねえ俺は」

「お黙りなさい！」

男一人に、反省の色は全く見えない。

イーシャやルシアがいない場所でラーグとティルガが出会つと、大概の場合口での言い争いから発展して剣を抜きあい、そこがどこであろうと切りあいを始めてしまつ。

まあだからといって仲が悪いのかといえば、そうではない。

これが、この一人流のコミュニケーションのとり方であるらしいのだ。ならばせめて口でのやりあいだけに収めておいて欲しいと周囲は切実に思うのだが、一人はお互になんとなく顔を合わせると剣を抜きたくなるらしい。

なんとなくで暴れるな！剣を抜くな！周囲の迷惑考えろ！

と貼紙をしてはどうだらうかと、一度会議の議題になつたとかならなかつたとか。まあ、仮にそんなものを貼り出したとしても、全く効果などないと誰もが思つていただろうが。

「そんなにやりたければ、訓練場にお行きになればよろしいのです！」

そんなわけで、王女の言つことば、「もつともな話である。

遠くから様子を窺つていた人々が、同意するよつに首を縦に振り続ける。けれどその中にいる軍人らしき一団は、なぜか難しい顔をしていた。

「それ前にも言われたけど、嫌

「なぜですか？」

にべもなく却下され、王女は可愛らしく頬を膨らませて兄を睨む。

「訓練場に行きましたら、問答無用でじこかれますからねえ」

ティルガも吐息をこぼしてそう言つが、普段訓練場に行く事など滅多にない王女は意味がわからず、首をかしげてティルガを見やる。

「訓練場には、もはやその主であるといつても過言ではないダルガ将軍がいらっしゃるのですよ」

「あのおっさんはティルガの事大好きだからね。姿を現そつものなら、鍛えたくて仕方ないんだよ。ね？」

「いやいや、俺ばかりではないでしょ？ ラーヴ様も立派に愛されておいでです」

「僕はルシア以外からの愛なんて、これっぽっちもいらないよ」

しみじみと頷きあう兄と護衛。

ダルガ将軍といえば、国一番の戦士の強者として有名である。その大軍をまとめる鮮やかな手腕と、秀でた武力を持つ御年四十三歳

の將軍様が、気に入つた人物をスバルタ教育で鍛え上げる・・・といふ話は、軍人達の間でのみ、まことしやかに流れている非常に有名な話なのだつた。

「半端ないから嫌いなんだよ。疲れるしさ」

「そうですね。一度龍と戦わせようとしたしね」

龍と人を戦わせるなんて正気の沙汰ではない。

力で叶わないのは当然の話だが、大陸を守護してくれている水龍に、大した意味もなく龍に挑んだと知られたら、どんな咎めがあるかわからない。どんな出稽古だ。

知らなかつたダルガ將軍の一面を知つて、呆然とする周囲を他所に、二人は再び剣を構えあつと、

「だからまあここでやるしかないよね」

「幸い、ここは廊下ですしね」

にやりと笑いあつ。

いや、何が廊下だと幸いなのか。

「だから、おやめなすこと言つていいでしょ!—.」

いち早く正氣を取り戻したラナスフィアは、再び兄と護衛を殴るハメになつたのだつた。

「それでも仲良し（後書き）

お読みくださいありがとうございます
お気に入り登録してくださる方が増えてて、すわ大変だと慌ててガ
シガシ続きを考えてます。

今回の分で、一応自サイトに掲載している分は出でてしましましたので、
大変大変（笑）

兄と妹

「それで？結局、お兄様はルシアに何の御用だったのです？」

ひとまずラーグとティルガを押しとどめることに成功したラナス
フイアは、気をとりなおして兄に声をかけた。

「ん？別に何もないよ。ただ一緒にいたかつただけ」

「この言葉だけ聞けば、まるで恋人同士のように感じられる。しかし
ルシアが迷惑だと思っている事を知っている王女にとつては、頭
の痛い言葉だ。

「お兄様・・・。ルシアがお兄様の事を、どう思っているのか・・・。
『存じですか？』

「うん。悲しいけれど、迷惑がられているね」

「それがお分かりなのでしたら・・・」

「でも困った顔も可愛いよね。たまんないな」

「うわつ変態だ。ここに変態がいる。

そんな言葉が王女とティルガの脳裏によぎったかどうかはわから
ないが、確実に二人とも固まつた。

「ルシア嬢が可愛らしいのは認めますけど・・・それって歪んでい
ませんか？」

「へえ。僕に意見するの？しかもルシアを可愛いって？死にたいの
？」

「いえ、死にたいか死にたくないかと聞かれましたら・・・」

「それはせつがやつましたでしょ、」

「ひらが眞面目に話をしようとしたのに、いつだつてこの兄は、のりつくりとばぐりかねうとしてしまうのだ。

「お兄様は、ルシアの事を、どうお思いになられています？」

溜息をこらえて、王女はこれまで幾度となく繰り返した質問を、もう一度繰り返した。

* * *

彼女の兄であるラーグは、幼い頃からなにかとルシアに構つていて、一年間の領地研修から帰つてきた現在、それが悪化しているように思える。

ルシアに本当に好意があるのならば、ラナスフィアにひとつは何の問題もない。

ルシアはお気に入りでもあるし、幼い頃から知つてているから、下手な貴族の娘よりもよっぽど兄の結婚相手にはいいと思う。彼女と姉妹になれるのは嬉しいし大歓迎だ。ルシアだつて、あれだけつきまとわれれば嫌でも意識しているはずである。今は戸惑つてているだけだとしても、兄が本気だとわかれれば眞面目に考えてくれるだろう。一人にとつての大きな障害といえば、やはり平民だという身分差だろうが、そんなものはどうとでもなる。いやむしろルシアの幸せの為ならば、自分がなんとかしようと思つてゐるくらいだ。

しかし。しかしである。

当の兄が、何を考えているのかわからないのである。
それがゆえに、ルシアの気持ちも定まらない。

他の兄達とは違い、母を同じくする兄妹であるのに、昔から「」の兄の考える事はよくわからなかつた。

学業も武術も魔術も、熱をいれてやつてているようには全く見えないのに、それがどんなことであれ人並み以上にやつてのける優秀な兄。

その点については妹として誇らしく思つてゐるが、もう一方で、何かといえば騒動を巻き起こす頭痛の種でもあるのが、この兄だ。

ランディス王家の兄妹達は、末妹であるラナスフィアを中心として仲が良かつたが、上の二人の兄とは年が離れている為、幼い頃はこのすぐ上の兄と過ごす事が多かつた。その頃の兄は、物静かであつたと記憶している。

ラーグの乳兄弟であつたディキンスの双子を交えてよく遊んだものだが、ラナスフィアが思い返す限り、兄はどちらかというと一人静かに本を読む方を好んでいたように思つ。

緑の木陰に座り、優しくそよぐ風に黒髪を遊ばせながら静かに読書にふける姿は、幼心にも我が兄ながら絵になる人だと思つたものだ。

そんな兄がどうやつて現在の姿になつたのか。その契機は、やはりルシアにあると思つ。

今でも鮮やかに思い出せる、あの日。

ラナスフィアが十歳、ラーグが十一歳の時。いつものように双子と遊んでいると、姿の見えなかつた兄が一人の女の子の手をひいてやつてきたのだ。柔らかな栗色の髪と大きな翡翠の瞳。特にこれといった特徴はないものの、可愛らしく思える女の子。彼女は不安そ

うに辺りを見回しながら、兄に言われるがまま彼女達の輪に入った。

それがルシアだった。

* * *

「どうして・・・。好きだよ？」

「語尾をあげないで下さいよ。ラーグ様」

「なんでそんな事聞くの？」

「無視ですか」

「本当ですか？」

「うん」

不審げなラナスフィアに、ラーグは綺麗に微笑みかける。幾度となく繰り返した問い。その度に返つてくるラーグの返事は、いつも変わらない。

その返事を聞くたびに、ラナスフィアは少し悲しくなる。

なんの臆面もなく、ルシアが好きだというラーグ。

ラナスフィアには、その言葉が信じられない。なんの臆面もないことが、かえつて不信を呼ぶのだ。

多分、ルシアもそう思っているからこそ、ラーグの事を疎ましく思うのだろう。

『ラーグ様には、お戯れも程々になさつて下さらないと困つてしま
います。一国の王子なのですから』

いつだつたか、ルシアがそこへぼした事がある。その姿はどこか
寂しげだった。

ルシアはラーグの言葉を信じない。

ラーグの言葉には、真実が感じられないから。

「お兄様がもう少し真面目になつて下さればいいのに・・・」

そうしたら、ルシアだつてもつとラーグに歩み寄つてくれるかも
しないのに。

「ハイハーモニカの音は、うまい」といふ。

「寝言は寝てから、おっしゃつてことをせー。」

憂い顔を見せるラナスフィアに、ラーグはおどけるように言つ。言つているそばから、この態度。妹は、そんな兄の姿に腹が立つて声を尖らせた。

「じゃあ今から、全てをイーシャに任せて寝に行こうかな」

「わたくしの言葉が過ぎましたわ…どうぞ存分にお働きになつて！
ルシアにも言われたのでしょうか？」

兄は迷惑をかけるのは止めて頂きたいのですか?」

ふざけでばかりの兄を叱りつけたつもりが、言質をとられて愛しい人の迷惑になるとは！

俄然焦つて、彼に縋りつく王女と不満そうな護衛を見ながら、ラーゲは楽しげに笑う。

「じゃあ、可愛い妹の為にもお仕事していよがな」

「・・・やっぱりまだ終わられていなかつたのですね」

ルシアに図書館での顛末を聞いてから、まだそれほど時間は経っていない。

本来であれば仕事をしている時間だろうに、こんな廊下で会づな
んておかしいと思ったのだ。大方イーシヤが出来上がつた書類を届
けに行つている間に抜け出して来たに違いない。

「少し休憩しに来ただけだよ。ルシアに会えなくて残念」

冷たい皿つきで見てくる妹とその護衛に、ラーグは悪びれもなく
そう言つと、ひらひらと手を振つて元来た道へと歩いて行つてしま
つた。

「全くもつ。不真面目なんですから・・・あつ！」

それを不機嫌に見送つてから、王女は大きな声をあげた。

「なんですか、一体。驚くじゃないですか」

「『めんなさい。でも聞き忘れていたのよ。あの噂の真相をお聞き
しなければと思っていたのに』

「噂？」

首をかしげるティルガに、ラナスフィアは近くに寄るよつて言つ
と、ひそめた声でその耳に囁いた。

「研修に行つていた間の一ヶ月間に咲いた噂話の真相をよ

「ああ、そう言えばそんな事もありましたつけ」

「ありましたつけ、じゃないわ。重大な問題なのよ」

その噂は、今ルシアがもつとも気にしている事なのだ。

ラーグは一年前に、領主の仕事や領地について実地で学ぶ為に城を離れた。

そして彼が領地研修に囁いていた間の一年間、兄の恋愛遊戯について聞かない日はなかつたのだ。研修地から、城都までは相当な距離があるにも関わらず、見事なほどに相手をとつかえひつかえしている様が風の噂として届き、王宮を騒がせた。さらにはその間、ラーグは一切ルシアに連絡をよこさなかつたのだ。

それが仮にも好意を持っている相手に対する態度だろうか？

散々浮名を流して城に戻り、戻った途端にルシアに猛然と構い出すとはどういふ見なのか、血族とはいえさつぱりわからない。

「あの噂の真相もはつきりさせなければ、ルシアが可哀想よ

王女は兄が去つた方を鋭い目つきで睨む。そして更にある事に気がついた。

「ちょっとーあちらは執務室の方角じゃないじゃないのー！」

「そうですね」

「そうですねじゃないわー！わかつていたのなら、何故言わないのー！」

「いえ、俺も今気がつきました」

しつとした顔の護衛に、王女は体を怒りの為に震わせながら叫んだ。

「だったら早くお兄様を捕まえて、執務室に連行してらっしゃいー！」

あの兄にルシアを任せるのは、よく考えた方がいいかもしない。

もう何度も目になるのかもわからなくなるほど自問自答した言葉が
思い浮かんで、ラナスフィアは痛み出した頭を抱えた。

兄と妹（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございます。
王子と嘘つきがそろつている場で、ストップバーがないと誰かが必要
ず負傷クジをひいてしまいます。

イーシャが書類を提出しに行つた隙に、まんまと仕事を抜け出したラーグは、手持ち無沙汰に王宮内を歩き回っていた。

すれ違う人々は、道を譲つて彼に一礼する。彼らは、本来なら執務時間中なのではと疑問に思いはしても、けしてそれを口に出すことはない。王族に対してもそれと声をかけることなど出来ないという事もあるが、日々王宮に勤める彼らにとって、第三王子が執務時間中に歩き回っている事は日常茶飯事なのである。

ただ、いつ怒ったイーシャが現れるかわからない為に、王子が通り過ぎると彼らの大半が足早になつてそこから遠ざかる。その大半からもれた者は、皆自分の身は自分で守れる者のみだ。

そんな彼らの事情を知つているのかいないのか、ラーグはただ気のむくままに歩いていく。

彼は現在、行き場を失つていた。

ルシアは図書室にいるそうだが、先程妹達にサボつているのがバレてしまつたので迂闊には近寄れない。

ルシアに会いにいけないのならば、他に特にする事もないのだが、仕事に戻るのはなんとなく嫌だ。大体今戻つたら怒られてしまう。かといって、どこに行きたいとも、何がしたいとも思えない。

「ルシア。ルシア。ルシア」

ふと、彼女の名前を呟いてみた。そうしたところで彼女が現れるはずもないのだが、少し満たされたような気持ちになる。けれど、彼女がいないとつまらない。

「本当に寝るか」

考えた末に、結局昼寝という案しか思い浮かばなかつた彼は、仕方なしにとある場所へと足を向けた。

* * *

「全く」

ルシアは慄然とした表情で呟いた。

彼女の視線は、こちんまりとした東屋に向けられている。その東屋は、王宮の裏側にある森の中程に、ひっそりと存在していた。

生い茂る木々の縁の中で、くすんだ白色の東屋だけがこっそりと潜められるように建っている様は、一種隠れ家めいたものを感じさせる。

ここは、五年前に暴走したイーキャガ穴をあけた場所で、ルシアにとつては死にかけたという思い出の場所でもある。

木々の中には、ぽつかりと開けてしまつたこの場所に、ラーグは東屋を建てさせた。普段あまり人が入らない森の中ほどにある東屋は、ラーグをはじめとした子ども達の大人に邪魔されない遊び場として重宝された。

しかし、成長した現在ではもっぱらここを利用しているのは、昼寝目的のラーグやティルガくらいのものだらう。

侍女であるルシアにとつては、ここは数ある掃除場所の一つとなつてゐる。東屋には劣化防止の魔法と、使用されていない時は周囲を囲うように保護する魔法がかけられているので、実質掃除の必要はないのだが、ルシアは三日に一度程度の割合で掃除をしに訪れている。けれど掃除が終われば他の仕事がある為、ゆっくりと腰を落

ち着けた事はない。

仕事がないにしても、ここは王子が所有する場所だ。幼い頃のように王族がそばにいるならいざ知らず、侍女風情が勝手気ままに利用していい場所ではない事をルシアはわきまえていた。

その東屋に彼女が何をしに来たかといふと、単純に掃除をしに来たのではない。掃除ならば昨日やつた。今回は、王女の命を聞いて人を探しに来たのである。

そう。イーシャに仕事を押し付けて、今までに田の前で眠りこけている王子様を探しに。

* * *

図書室でラナスファイアを待っていたルシアの元に、苦みばしつた顔つきで王女がやつてきたのはつい先程の事である。

王女が図書室に行くといふので、本の準備や先触れをだす為に、ルシアは一足先の図書室へと行っていた。しかしあまりに王女が遅いので、様子を見に行こうかと思っていたところへ王女がやつてきたのだ。その王女の後ろに困惑顔の兵士が立っている事に気づいたルシアは、ティルガの不在に首をかしげる。

「姫様、どうされたのですか？ティルガ様はこ一緒にではなかつたのですか？」

「ティルガには、今ラーヴお兄様を探してもらっています

ルシアの疑問に、王女は恥々しげに返答を返すと用意されていた椅子に、普段の彼女にしては少々荒い仕草で腰をおろした。

「ラーグ様を？」

第二王子の名前に不吉なものを覚えて、眉間に皺をよせるルシアを見やつて、ラナスフィアは表情を和らげると、かいづまんで図書室への道すがらにあつた出来事を話して聞かせた。

「本当に根っからのお仕事嫌いでいらっしゃるんですね・・・まあ存じていましたけど」

聞き終わったルシアは、そう呟いて頭痛をおやえるよつに額に手をやつた。

「わたくしも探してみたのだけれど、見つからなくて・・・それでね、ルシア」

「ええ、承知しております。私もラーグ様を探して参ります」

溜息がでそうになるのを飲み込んで、主に皆まで言わせずルシアは答えた。

「ええ。悪いけれど、お願ひね。お兄様を逃がしてしまったのは、わたくしの落ち度。このままでは、わたくしのせいにイーシャに迷惑がかかつてしまつ。そんな事、耐えられないわ」

ラナスフィアはそう言つと、悲しげに長い睫毛を伏せた。自分が好きな人の迷惑になつてしまふかもしれないと嘆く王女は、憐りで尚いつそう美しい。ティルガの代理として護衛を言い付かつたのであらう兵士は、そんな王女に痛ましい眼差しを向けている。

「そんな事になつてしまつたら、わたくし・・・」

しかしルシアは王女の事をよく知っていた為、同じように勞りの眼差しを向けるわけにはいかなかつた。それどころか体を硬直させる。

ミシッ・・・

その時、なにかがきしむような音がした。

何の音だらうかと怪訝に思つた兵士は周りを見回してから、その音の出所を知つて目をむいた。

それは王女の座る椅子からだつたのである。
華奢な王女の手が、椅子の肘掛を握り締め、それを力強く握り締めているのだ。

その手に掴まれた部分が、次第に指の形にへこんでいるように見えるのは目の錯覚であるうか？

「わたくし・・・」

俯いていた顔をゆつくりとルシアの方に向けた王女は、その美しい顔に華やかな笑顔を咲かせていた。

ルシアはその笑顔を見たことがある。そう、三年前に王の部屋で。

「あなたに、何をしてしまつか、自信がありませんわ・・・？」

硬直しているルシアに、王女は殊更ゆつくりと優しく、そつぱに手を出すしかない。

ラーグに直接罰をされたとしても、あの兄のことだから痛くも痒くもないに違ひない。ならば彼に痛い目を見せるためには、ルシアに手を出すしかない。

その事を、ラナスファイアはよく承知していた。彼女とて罪のないルシアに手を出すのに、良心が痛まないわけはないが、兄にコケにされた上にイーシャに迷惑がかかるとなれば話は別なのである。

「肝に銘じておきます・・・」

ああ・・・理不尽・・・。

そうは思つても、王女に言えるわけがない。今まで何度もこうやってラーグ関係で、わが身に危険が迫つたか。数えるのも疲れるくらいだ。泣きそうな顔で硬直しているルシアを見て、兵士は彼女に同情の眼差しを投げた。

* * *

そんな経緯があつて、ルシアはラーグを探す羽目になつたのだが、彼女にとつてラーグを探すこと事態は、さほど難しくない。幼い頃からの付き合いと、日頃の付き合いのおかげで、彼の行動パターンは読めている。心中だけは昔も今もさっぱり読めないが、行動パターンだけならば彼は至極シンプルだ。

大抵の場合は、彼女にとつては不本意ではあるが、彼女の元へ真っ直ぐやつてくるか。

そうでなければ、読書をしているか。

あるいは、どこかで昼寝でもしているか。

いの三択しかない。

物事への執着が極端に低い彼は、あまり積極的に他人や物事に関わろうとする事がない。問題児ではあるが人当たりは悪くないし、持ち前の有能さと美貌もあって人望は高い。特に王家の長男が結婚し、次男に婚約者がいる現在は、ご令嬢方から絶大な人気があるといつてもいい。

しかし、そういう人たと一見親しくしているように見えるもの、家族と双子の乳兄弟以外では、ルシア位しか彼から懇意にしている相手はいないのではないだろうか。

「お遊びになる相手でしたら、沢山いらっしゃるようですがれど」

何とは無しに呟いた言葉は、思つた以上に自分の胸にさせた。その事が腹立たしくて、情けない。

確かに懇意にしている相手はルシア達しかいなかつただろう。一年間の研修に行く前は、

華々しく王宮に舞い込んできた噂の数々を思い出して、ルシアは眉を顰めた。

聞きたくなくても耳に飛び込んでくる、第三王子の秘め事の数々。その都度、聞こえる名は違うもので。

けれど、その全てが戯れであったと誰にわかる？

そう考へてゐるくせに、同じ名を聞く事が一度もなかつた事に、少しの安堵を感じてゐる自分が嫌だつた。

私は侍女でしかない。だから、心を揺らす必要なんてない。

そういう聞かせても、噂を聞く度に動搖する自分が情けなかつた。

「ダメダメ！」

危うく暗い感情に支配されそうになつたルシアは、大きく頭を振つて考えを追い出した。

今は自分の保身の為にも、ラーグを探す方が先である。イーシャが絡んだラナスフィアは本気だ。それは幼い頃からの経験でわかりきつている。昔を思いかえして戦慄し、慌てて目の前のことに集中する。

図書室にルシアがいて、その図書室には近づけないのであれば、ラーグが選ぶのは残りの一つの選択肢のみだ。

一年の間に、その選択肢に遊び相手のところという項目が増えていない事を祈るばかりではあつたが、ルシアはひとまずラーグが昼寝に利用しそうな場所からあたつてみる事にした。

そうしてこの東屋にて、眠れる王子様を発見したのである。

田の前で静かに眠る麗しい王子の寝顔を拝見するに、自分の考えは間違つていなかつた事をルシアは確信し、そして選択肢が増えていなかつた事に、我知らず小さな安堵を感じていた。

こうやって眠つていれば、ただただ無害なラーグに溜息がこぼれ、いつそのこと、このまま眠つていればいいのに・・・と思いかけて、頭を振る。

「どうあえず起きていただくとして・・・」

今度はどうやって仕事に戻つてもらおうか。ラーグの寝顔を見ながら、ルシアは頭を悩ませた。

選択肢（後書き）

お読みくださいありがとうございます！

お気に入り登録が30件になつていて、ビックリしました！

引き続き頑張ります！と言いつつ、ちょっとこの先氣に入らなくて

作り直します！

頼み込む?
気をひいてみる?
それとも泣き落とす?
はたまた脅す?
怒つてみる?
宥めすかす?
騙す?

今まで散々ラーグに使用してきた方法を、頭の中で巡らせる。
そのどれもが一定の効果は上れるものの、それほど長続きしないものばかりだ。

ラーグは有能だが、自分の興味がわかない事には、とことん集中しない。仕事を溜めに溜めてから、やっと重い腰をあげる。そして文句を言いつつ、それらを集中して二日程で仕上げてしまうのが常だ。

そんな集中力があるなら、常日頃から発揮していればいいのことを皆が思い、実際イーシヤも口をすっぱくして進言してはいるのだが、一向に聞き入れられる気配はない。

たまにルシアが口を挟む事によって、ある程度は集中してこなすものの、やはり飽きてしまうのか、しばらくすると仕事を放り投げてしまう。

小さな子どもではないのだから、仕事くらこきつちこなして欲しいものである。

つらつらと取り留めのない事を考えながら、無礼だと思いながら

も寝顔を覗き込む。よく眠つてゐるようで、ちつとも起きる気配がない。

下手すれば、女性であるラナスフィアよりも整つてゐるのではないかと思わせる顔は勿論の事、手の形も、その長い指も、しなやかに伸びた腕や足も、ラーグの全てが世界を作られた天龍に特別に愛されて作られたのだと、皆にそう思わせるだけのものがある。後は中身をえちゃんと作られていれば、言つ事なかつたのに。

「昔はもつ少し、根気がおありだつたよつた気がしますよ」

ラーグを起こさないよう、そつと咳いて溜息を零す。

「えつ」

その瞬間、そつとのびてきた手に腕を捕らえられた。

驚きで目を見張るが、力強く引き寄せられて咄嗟に目を閉じた。背中に温かな腕がまわされて、少し苦しこと感じじる程にしめつけられる。

頬にあたる温もりと、聞こえてくる心音。

恐る恐る目を開いてみると、ルシアはラーグの上に抱きつづりにして乗つていた。

急な出来事に驚きすぎて声も出ない。

眠つているとばかり思つていたのに、実は起きていたのか。

彼はまた飽きもせず、じうじう自分で自分をからかうのか。

途端に腹が立つてきたルシアは、ラーグの胸に手を置くと勢いよく顔を上げた。

そこには案の定、楽しげに笑う王子の顔。

「ラーグ様、お目覚めでいらっしゃったのなら、なぜ教えてくださいのですか！」

怒りに任せて、いつになく強気に自分を見返してくるルシアを見やつてラーグは甘く囁く。

「ん？ 今起きたとこりうだよ？」

その声は掠れていって、確かに寝起きの声のよつとも聞こえる。けれどルシアを拘束する腕の力は強く、とても起きぬけの人間の力とは思えない。

だが、もうルシアにはそんな事はどうでもよかつた。ラーグが起きたのであれば、後は速やかに執務室に連れて行って、仕事をさせるのみだ。その為には、こんなとこりうで油を売つている暇はないのだ。

「とにかく。お田代めになられたのなら、早くお離しあさつませ
「嫌。せつかくルシアを抱きしめているのに、もつたいない」

何がもつたないのかさっぱりわからないが、早く離して欲しい。そんな気持ちをこめてラーグを睨みつけるが、彼は一向に意に介した風もなくルシアの頭を撫でてくる。
その青の瞳に、怒った顔の自分が映っている。
そこでルシアは、はたと我に返った。

なんですかー！この至近距離！！

怒りで忘れていた羞恥心が突如わきあがり、彼女はラーグを見ていられてなくて顔を伏せ、彼の胸元に顔を隠す。

彼の瞳を、見てはいけなかつたのに。
その一連の動作を、楽しく見ながらラーグはルシアの頭を撫で続ける。

「昔はよくこうやってひつひついたよね。ルシアは柔らかいから、気持ちよかつたなあ。今も気持ちいいけど」

瞬間、ルシアの顔が真っ赤に染まった。

気持ちいいとか、なんてことを言つのだろうか。この王子様！確かに子どもの頃は、よく彼と手を繋いだり抱きしめられたりしていたが、そんなことは記憶の彼方に追いやっていたというのに！羞恥でフルフルと震えるルシアの髪に口付けが落とされる。

「あんなに仲良くしてたのに。近頃のルシアは冷たいよね」

口付けとともに落とされた咳きは、いつもとは違つて硬さを含んだものだった。その声は、日頃優しく響く彼の声しか知らなかつたルシアにとって、とても異質に響いた。

「前も素つ気ない時があつたけど、今はもっと冷たい

「ラーグ様？」

怪訝に思つて顔をあげてみると、笑みを消した真剣な表情のラーグと目が合う。

その瞳が怖くて咄嗟に目をそむけると、体勢をひっくり返され、先ほどまでラーグが寝そべっていた長椅子に体を押し付けられた。心臓が大きく跳ねる。

「え、ちょっと待つて！ 一体、なんで、ビラして、どうすれば、この状況？」

頭の中で、言葉がグルグルグルグル回つて、声が出ない。

人間の心臓が、一生で脈打つ鼓動の数は決まっているといつ。

顔！顔が近いのです！ラーグ様！…」のままじゃ私、寿命が縮んでしまいます！

体全体に柔らかくかかる彼の重さに狼狽したルシアは、無意識に両手をつっぱってラーグの体を少しでも離そうとする。けれどルシアの力がラーグに勝るはずもなく、抱き込まれるようにして顔を覗き込まれた。

「ねえルシア」

「・・・・・」

「ルシアは、僕のことどう思つてるの？」

それは図書室でも聞かれた問いかけ。
結局イーシャが乱入してきてくれたおかげで、答えを言わなくてすんだ問いかけ。

貴方のことをどう思つているのかなんて、私の方が聞きたいくらいです。

戸惑うルシアに、ラーグは手馴れた仕草で頬に手をよせて、彼女の顔をもちあげた。

その仕草が胸に痛い。

目と目があつて、ルシアは不意に自分の中が冷たくなるのを感じた。

図書室で腕に囲われた時も。

先ほど引き寄せられた時も。

「いやして押し倒されている今も。

下にいる自分を潰さないよう、けれど逃がしもしないよう重々をかけてくる気遣いも。

その全てに、女性に慣れた雰囲気を窺わされて。

胸の内がよどんで、重くなつてくる。

「の感覺が。

「嫌いです」

静かな声が東屋に響いて、ルシアは我に返った。田の前のラグは、少し田を見開いて驚いた顔をしている。

「嫌い? どうして?」

そういうた声にも、驚きがにじみでいる。

意図せず口にだしてしまった言葉だが、嫌われているということがそんなに意外なのだろうか。ルシアにしてみれば、胸に手をあてて自分の行動をよく思い返して欲しいと思う。

なんだか意地の悪い気分になるとともに、今を逃せばもう言えないのではないかと思い、そのまま何も考えずに彼に向けて言葉を続けた。

「私の仕事を妨害なさるとこよりも、お仕事をちゃんとしていくんだないところも、他の人に迷惑と心配をかけて平氣でいらっしゃるとこも、いやして不用意に私なんかに触れてしまつ、」と身分をお

考えにならないところも、誠実でいらっしゃらないところも、全て嫌いです。嫌いなんです。迷惑なんです。私に構わないで頂きたいんです。」

一息に言い切った彼女は、身の内で自分に拍手を送った。

「うとうつ言いましたー言いつやりました！

「これで気分を害して咎めを受けたとしても、今の爽快感が味わえるなら何度も言つてやる。

しかし、そんないつにない強気な気分で浮き足だつ心は、次のラグの言葉と表情に一瞬にして冷えた。

「へえ。ルシアに嫌われるなんて思つてもみなかつたな」

それはそれは綺麗な笑顔が、この上なく恐ろしい。怒ると笑顔になる点は、やはり兄妹。至近距離での笑顔が尚更恐ろしい。

「す、ぐ傷ついたから、どうやって慰めてもらおうかな？」

傷ついたという割に、弾んだその声はなんだ。あらぬところへ伸びされようとしている、その手はどうわけだ。

「ちょ・・・ラーグ様！手！手が！」

「んー？手がどうしたの？」

「その！御手が！・・・やつ」

貞操の危機。

押さえ込まれたこの状況で、ルシアは初めて近年まれにみる貞操

の危なさをやつと理解した。

「おやめください…本氣ですか？！正氣なんですか？！勿論、冗談ですよね！」

「冗談だとおっしゃつてくださいまし！」

「失礼だね。僕はいつでもルシアに關する事なら、本氣だし正氣だよ。」冗談なんて塵一つ分もないね

尚、始末が悪い！

「」は、図書室よりも人が来ない森の中である。第三者による助けなど期待できそうもない。

押し付けられてくる温もりとその重さ、そして触れてくる手、「」に落ち着かない頭をなんとか巡らせて、ルシアは「」の状況から脱する術を図つて腕を伸ばした。

御覧下さり感謝です！

王子が絶賛セクハラ中です。少しほラブになってきたでしょうか？

侍女の切り札

ラーグは不意に首に回された腕に、ルシアの顔を見ようとしたが、その腕に力をこめられて彼女の方へと引き寄せられた。抗う必要も、抗う気持ちもなかつたので、引き寄せられるままに彼女の肩口に顔を埋める。そうして拘束されると、どうして彼女がそのような行動に至つたのがわかつた。

この態勢では、彼女の体に触れることができないのだ。

一生懸命に彼の動きをおさえようと頑張つてゐる姿が、可愛くて可笑しくてたまらない。

「ルシア？これじゃ動けないんだけど？」

けれど、そんな内心を抑えて、声に不満をこじませてやつてみる。

「お動きにならなくていいんです！…じつとじつて下せこませ！」

彼女の少し勝ち誇つたような声が面白い。
離して欲しがつていたくせに、じつとしてこゝとは。自分が墓穴を掘つてゐるとは、考えも付かないよつだ。

「じつとしていいんだ？じゃあ、ずっとこのままによつが」

ラーグがそう言つと、案の定ルシアは硬直した。顔は見られないけれど、きつと泣きそうな顔をしているに違いない。ルシアの表情を想像して、小さく笑いがもれる。

ルシアからは、ほのかに甘い香りがして心地いい。触れられないのは惜しいけれど、こうして柔らかい彼女を抱きしめているだけで

も十分満たされる。正直「嫌い」と面と向かって言われたのには言葉以上に衝撃があつたが、それもこうしていれば治まる気がする。このままじつとしていれば、再び眠りに落ちそうだった。

「ラーグ様は・・・」

ゆつたりした気分でいると、ルシアから小さな声が聞こえた。

「なに?」

「こういった・・・お相手をして下される方は、沢山いらっしゃるのでしょうか?」

躊躇つようこむつと紡がれる言葉に、ラーグは内心首をかしげる。

「もう私などに構わなくともよこはすでしよう?」

何が言いたいのか今一つ掴めなかつたが、次に続く言葉は容易に想像できた。

「だから、私には構わないで下さいって?ルシア、君つて本当に冷たくなつたよね」

「お戯れも程々になさらないと大変な事になると、『忠告をしあげているのです』

「お戯れじゃないんだけど?」

ルシアは昔からこうだ。ラーグが何を言つても、戯れだ、戯言だと信じよつとしない。

ラーグは本当に彼女の事を気に入つてゐるし、側に置いておきたいと思つてゐるのに。

「それなら・・・それなら・・・」

彼に茶化されたと思つたのか、ルシアが苛立つたよつて声をあげた。

「あの一年間の噂はなんだつたのですか!」

首元にしつかりと抱きついていた腕をほどいて、ラーグを睨みつけてくる。腕をほじかれた事を残念に思つても、彼はルシアの目に悲しそうな色が潜んでいることに感つた。

「一年間の噂つて?」

「お綺麗な方々との秘め事の数々、この王宮にまで届いておつました!」

わあ～どうだ～とばかりに言つ切るルシアに、彼はきょとんとした顔をする。

「そんな噂流れてたの?何?」
「よつぱり娛樂に餓えてるの?」

「ラーグ様のお噂だからでゅー。」
「自分の影響力の高さを、ちやんと
『血覚トセコモフー』

王子は「ふーん」と感心したのかなんなのか、わからない声をあげた。

「まかそつとなつたつて、そつまいかないんですからー。」

「べり坂にしなつよつて思つても、耳に入る度に動搖をお

さんることことができなかつた数々の噂。

もし、自分もお遊び程度の気持ちで構われているだけなら？

本当も何もない、おふざけだつたとしたら？

そりやアルシアはただの庶民で、ラーグは大国の王子様。身分違
いも甚だしいし、そんな夢を見る方が馬鹿らしいとルシアは思う。

だからといって。

「んなにも、盛大に迷惑をかけられているといつのこと、それつ
てアリなんですか？」

噂を聞いて考える度に、腹が立つて仕方なくて、ついつい甘いも
のを自棄食いしてしまつたりしたのだ。

これだけ傍迷惑に構われているつているのに、それが本当にこれ
っぽつちも心のない、ただのお遊びなんだったら、迷惑かけられた
こちちが馬鹿みたいじゃないですか！

そう！ただそれだけなんですから！大体自棄食いしたおかげで、
体重が増えていたらどうしてくれるんですか！怖くて量つてないで
すけど！

轟々と燃え盛るルシアの心の内を知らず、ラーグは少し考える素
振りをした後、見る者を蕩かすような笑顔を浮かべた。

「ルシア、それってヤキモチ？」

さも嬉しげに言つ。

「・・・は？」

それは予想していなかつた言葉だつた。あまりの面白中心的な考え方には、ルシアは睡然とする。

「そりだつたのですか！ルシア嬢！」

さらには後方から聞き覚えがありすぎて仕方ない声が、ものすごく驚きました！といつ雰囲気をただよわせて聞こえてくる。ただし棒読みであるが。

振り返ればそこには案の定、片手で胸元を閉じ、もう片手で胸元を握り締めて、驚愕に顔を引きつらせているティルガ・ディキンスがいた。

「・・・・・ティルガ様。いつからそこへいらっしゃったのですか？」

ルシアの静かな問いかけに、ティルガはすぐさま胸を張つて答える。

「さて。かれこれ、いつからになりますかなあ」

「早く正直にお答えいただきませんと、イーシャ様に言いつけてます」

「ラーグ様がルシア嬢を押し倒された時には、もうここに控えていました」

と、いう事は、この男はそれからのアレコレをずっと見ていたというのか！

「なぜ助けてくださいなかつたのですか！？」

「まだに上にのしかかっているラーグを押しのけ、ルシアは体を起こすとティルガに食つて掛けた。

「いや、ラーグ様が田で殺すぞと脅されるもので・・・」「！」

ラーグを振り返ると、同じように体を起こした彼はルシアの視線に爽やかに微笑を返す。

「ここにティルガ様がいらっしゃるのをご存知だつたんですか！」

知つてて、あんなこつ恥ずかしい真似をしていたのか！

「それにしてもルシア嬢は大胆でしたねえ。自分から抱きつくなんて、まあ・・・」「

「ルシアは柔らかくて気持ちいい上に、いい匂いがするんだよ」「！」

震える彼女を無視して話し出す男どもに、ルシアは胡乱な目を向け懐から丸いなにかをとりだした。銀色の枠に透明感のある青色の宝石をはめこんであるそれは、一見ただのブローチのように見える。ルシアは、その青の宝石に触ると平坦な声で言った。

「イーシャ様、ルシアです。恐れ入りますが、ご足労願えませんでしうか」

その言葉を聞いて、談笑していた二人は慌ててルシアを見やつた。彼女はそれを再び懐に戻すと、につこりと微笑んだ。

「少々お待ちくださいませ。今すぐにいらつしゃるやうですから」

ルシアが言い終わるか終わらないかのうちに、彼女の目の前に黒い穴が開き、そこから泣く子も黙るイーシャが現れた。

「確かに執務室で仕事を片づけていらつしゃるはずのラーグ様が、何故ここにいるのでしょうか？さらにはラナスファイア様の護衛をしているはずのティルガはここで一体何をしてるんだ？」

「イ・・・イーシャ・・・・」

「兄上・・・・」

逃走する機会を逃した一人は、彼の前でただただ固まるのみ。

青の宝石は、イーシャに直通で通じる通信機。日頃ラーグに困られているルシアを不憫に思つたイーシャが、数年前に手ずから作った魔法具である。通信機能以外にも、ルシアの居場所を知らせる機能がついているので、逃亡すれば、まず間違いなくルシアの元に行くラーグを発見する際にも役立つていて。

こうやつて実際にルシアがイーシャと通信するのは、今回が実用してから初めてであつたが、感度も機能も良好だ。

忙しく働いているイーシャを、こうして呼び出すのは気がひけたが、今回のことば腹に据えかねたのである。

性質が悪いにもほどがあります！

イーシャに怒られている一人を見やつて、ルシアは溜飲を下げる。結局イーシャの手を煩わせる事になつてしまつたが、これでラーグも仕事に戻らざるをえないだろうし、王女もなんとか許してくれるだろう。それに王女は王女で、仕事をサボつていたティルガを叱るのに忙しくなるはずだ。

「ルシア、連絡ありがと。いつも迷惑をかけてすいませんね。ひとまずラーグ様は僕が引き取ります。ティルガに関しては、僕からラナスフィア様にお伝えしておくれ。・・・ティルガ、わかつているな?」

ひとしきり王子と弟を叱りつけたイーシャは、ルシアに優しく声をかけ、ラーグの襟首をつかむ。そして弟に極寒の視線を投げつける。

「はい、兄上!申し訳ございません!」

それを受けた直立不動で立つティルガの顔色は青く、普段の飄々とした姿が嘘のようであった。

「じゃあ、ルシア。後は自分の仕事に戻つてもうひとつ構わないからね」

最後にもう一度ルシアに声をかけると、イーシャは王子の襟首を掴んだまま、でてきた黒い穴へと向かう。

「ありがとうございます。お忙しいのにわざわざお足労頂きました、申し訳ございました」

「あ、ルシア」

その姿に一礼して微笑むルシアに、ラーグが声をかける。
まだ何か御用でも?と不機嫌に睨みつけると、ラーグは珍しく苦笑して

「あの噂、ルシアには関係ないから。君が気にする」とじゃない

そう言つと、黒い穴へと消えていった。

後には、ラーグの言葉に呆然と立ち尽くすルシアと、嘆息して天を仰ぐティルガのみが残された。

侍女の切札（後書き）

御覧下せつ、ありがとうございます。
ちょっとぐだぐだになってしましました；
もう少しあとスマートになるとよかったですけどねえ
・・・。

HIN様の裏事情（前書き）

遅くなりました！

楽しみに待つていてくださった方がいらっしゃると嬉しいです

王子様の裏事情

初めて彼を見た時、その青い瞳に目を奪われた。

紺色に近い、深くて濃い青。

なのに、その色は見る角度や光の差し具合によって色を変える。見たこともない深い海の底の色というのは、きっとこんな色なんだろうと思った。

* * *

「はあ・・・」

仕事の合間の休憩時間。控え室にて、同僚達と仕事の愚痴や鬱憤について語り合い、噂話に花を咲かせる憩いの時間。思い思いにかしましくお喋りする同僚達の只中にあって、ルシアは一人溜息をこぼす。

「ルシア、それもう何回目？朝からずっとじゃない」

同じ席について、ルシアの様子を窺っていた侍女が呆れた視線をよこしてきた。

彼女の名前はココット・イラザイル。ルシアと同じ時期に侍女見習いになつた同期で、ラーグ付の侍女だ。その上、使用人寮・ゼツフェル館において相部屋の相手でもある為、同僚達の中でも特に仲

がいい。

貴族達が、髪の長い女性を好む事を知っている侍女達の中では珍しい事に、彼女はその栗色の髪を耳の下あたりでぱっさりと切ったショートカットだ。しかし、その髪型はショートの活動的な雰囲気と、その美貌によく似合っていて、彼女を気に入っている貴族が多い。

「・・・そんなにしている?」

「うん。朝からずっとね。あ、昨日からずっとかも?」

憂鬱な溜息は、溜息をついた分だけ自分に伸し掛かってきて、更に憂鬱にさせる。

わかつてはいるけれど、無意識にでてしまつのだ。

「だーかーら、早く口に出しちゃいなよ。やつしたらスッキリするつて!」

翡翠の瞳を好奇心に輝かせて、ショットが身を乗り出していく。

「どうせラーラー様が関係してるんでしょう? ルシアが憂鬱そうな時つて大抵そうだもん」

「そんな事ないよ・・・多分」

「いーや、そんな事あるね。絶対あるね。んじゃ、今日は何が理由なのよ?」

「う・・・」

「ほーりー」

途端に口元もるルシアに、ショットは勝ち誇った笑みを見せると、紅茶を一口飲む。

「で？」

「うう・・・」

チラリと視線をよこしてくる口コシトに、ルシアは観念して重い口を開いた。

* * *

「そりゃあ、私には王族様方の華々しいお噂なんて関係ないよ？そんなのわかつてたよ？わかつてたけど、あれだけベタベタつきまとつておいて、人に迷惑かけとい、関係ないからつて気にするなつて酷くない？」

「うん」

「別に私に構つてたのなんて、ただの気まぐれだつてわかつてる。私だつて本気になんてしてないし。噂だつて、ちゃんとしたお相手がてきて、私に迷惑かけないでいて下さるなら、別に好きにしたらいいじゃないつて思うし・・・」

「うん」

「大体、ラーグ様のおっしゃる事なんて、全然信用できないし、する気もないし。いつも本気なのか嘘なのかわかんない人なんて、面倒この上ないと思うの。それが王子様なんて、身分違いもここに極まれりよね！からかうのにも程があると・・・」

「うん。わかつた。わかつたから、ちょっと落ち着こうか？」

ポンポンとルシアの方を叩くと、口コシトはルシアと自分のカップに紅茶のお代わりを注ぐ。

「要するに、ルシアはラーグ様に過去の女性達との噂を、君には関

係ない！ってバツサリ切られた事が不満なわけね」「別に不満じゃないわよ！私には関係ない事だもの」

眉間に皺を寄せて、ルシアはカップを手に取る。

「・・・そ、う、よ。ラーグ様が、ど、こ、で、何、を、さ、れ、て、よ、う、と、も、私、に、は、関、係、な、い、事、だ、も、の、・、・、・」

眩くよつこ言つて、お茶を飲むルシアに、ロロシトは困つたといふ顔を向けた。

「でも、気、に、な、る、ん、で、し、ょ、？」

「・、・、・、別、に、」

ふいと顔を背けるルシアの様子には、ありありと「気になつてます！」とでている。

「あのね、私思つんだけども。ラーグ様つて、なんか人とはちよつと違つじやない？」

ロロシトは、不機嫌なルシアに顔を近づけていた。「でしょ？」と同意を求めてきた。

確かにラーグは、普通の人とはちよつと違つ氣がする。

けれどそれを言つてしまえば、キレると暴走するイーシャや、イーシャの為なら無茶をやらかす王女様、嘘ばかりついてイルガはどうなるのか。あれらも立派に変わり者だ。

改めて自分の周囲のちょっと変わった人を頭に思い浮かべてみて、ルシアはげんなりした。

「ほら、見習いだった時にさ。ルシアはいなかつたけど、私達、王

族様方に顔見せしに行つたじゃない?」

「ええ。私、あの時熱をだしてしまつたから」

王宮に仕える者達は最初に王と面会し、それから篩いにかけてある程度使い者になると認められた者達だけが、他の王族達と面会する。

ルシアは使い者になると認められたものの、面会日の前日から熱をだしてしまつて面会には行けなかつたのである。それで後日一人だけ面会する事になつてしまつて、酷く緊張したのだ。

「それでさ、ラナスフィア様とかはさ、にっこり笑顔で煌びやかに、そりやもつ舌足らずの可愛い声で『よろしくお願ひしますね』つておっしゃつて下さつたんだけど、ラーグ様だけはお人形さんみたいに黙りこくつてたまんまだつたのよ」

「そうなの?」

ルシアの印象ではラーグはいつも笑つてゐる時が多く、真面目な顔をしてゐる方が稀なので、ココットの話は意外に思えた。

「そうなの。なまじあれだけ綺麗なもんだから、ちょっと怖かつたもんよー?」

「想像つかない・・・」

「まあルシアの前では始終、笑つていらつしゃるものね」

「そうね・・・え? ちょっともしかして?」

「そう。今もそうなのよ?」

ラナスフィア様とかご家族様と一緒にの時と、イーシャ様やティルガ様が一緒の時はまた別みたいだけねー。

そう言つてお茶菓子のクッキーをつまむココットに、ルシアは驚

きの眼差しを向けた。

「ええ？ 私、そんなの知らない！」

「そりゃ そうよ。あんたの前じゃ 別人だもの」

ラーグが一緒にいる時は、彼をどうにかする事で必死だし、いな
いならないで、邪魔される前に早く仕事を片づけようと必死にな
つてるので気づかなかつた。それに言われてみれば、ラーグがル
シア達以外と一緒にいる所など滅多に見た事がない。彼には大抵イ
ーシャがついていたし、そうでなければ一人でいる事が多かつた。

「ラーグ様、絶対ルシア以外の私達の名前知らないわよ。賭けても
いいわ。だつて何年もお側付やつてるのにラーグ様から、名前呼ば
れた事なんてないもの！ どうよ！」

「そこは威張るところなの・・・？」

えつへんと胸を張るココットに、ルシアは呆れの視線を送るが、
彼女の言う事が意外で仕方なかつた。

ルシアの印象では、ラーグは人懐っこい人間だつた。

ラーグと最初に出会つた時、彼の方からルシアを遊びに誘つたぐ
らいなのだから、てつくり彼はそういう人見知りのしない、人懐つ
こく笑顔の絶えないタイプだと思っていたのである。まあ性格に難
がある事は、出会つてすぐにわかつたけれど。

「だからさー？」

「え？」

「ココットは、再びクッキーをつまみ、それをルシアに向けながら
穏やかに微笑んだ。

「あんたの事、かーなーりー氣に入つてると思つのよ？関係ないつて言葉の真意はわかんないし、本当にどう思つてるのかなんて、本にしかわかんないけどさ。からかつてるつてのだけは、あたしは違うと思うのよ」

そう言つて、クッキーをサクッとかじつた。

「ラーグ様はさ、自分の興味のあるなしを、ハッキリ分けるタイプじゃない？興味のあることには真っ直ぐズドーン！だけど、ない事には最っ高に無関心。ある意味わかりやすくはあるよねー」

あははーと笑うけれど、まさに興味のあることに分類されているだろう我が身を振り返ると、ルシアはなんとなく笑えない。

「案外、噂の真相もそつだつたりするのかもつて思わない？」

「どういうこと？」

「言ひ方悪いけど、本人にとつては取るに足らない瑣末な事つて思つてるから、噂になつてようが気にもしないし、ルシアにも大した事じやないから気にする事じやないつて言うのかな、と」

「・・・よく、わからないわ」

そうなのだろうか？

彼にとつては、女性達と繰り広げたあの秘め事の数々は、取るに足らない出来事で、少しも関心のある事ではなかつたのだろうか？

でも関心がないとすれば、どうしてそんな事をしたのか。

大体取るに足らないつて、相手の女性達にとつて失礼ではないのか？

「ルシア、眉間に皺

「ハハハに眉間をグイッと押されて、ルシアは我に返った。

「と、とにかく!私には関係ないんだから!」

彼女の言葉によつて、少し自分の気持ちが軽くなつた事がわかつたが、ラーグが普段どうだつて、どうこう考えを持つていうと、ルシアには関係がないのだ。

関係ないつたらないのだ。

「そー? 隨分、気にしているようですがねー?」

ハハハトが一ヤ一ヤと笑いながら、声にださずこ「た・め・い・
や」と呟く。

「わーいーいのー!」

真面目にラーグを擁護していたかと思えば、打つて変わつてからかい始める同僚に、ルシアは拳を振り上げ追い掛け回し、結果アドリ一侍女長に「落ち着きがありません!」と怒られてしまつたのだった。

「お兄様！ちょっと失礼いたします！」

ルシアが溜息を量産させていた頃、ラーグは執務室にて、妹の強襲にあつていた。

「いらっしゃいませ。ラナスフィア様。本日はどうなさつたのですか？」

「ああ、イーシャ。ご機嫌いかが？お仕事中なのに、お邪魔をしてしまつてごめんなさい。少しの間、お兄様をお借りしたいのですけれど、よろしいかしら？」

「ええ。構いませんよ。昨日あらかた急ぎのものは終わりましたからね」

ラナスフィアが、イーシャに向けて可愛らしく微笑むと、イーシャもそれに笑い返す。そんなほのぼのとした二人の空氣に、不思議そうな声が割つてはいる。

「ねえそこの人。僕の意見は無視なの？」

執務机から頬杖をついて、二人を見上げるラーグに、ラナスフィアは先程とは打つて変わつた冷たい目を向け、

「お兄様に選択肢なぞありませんわ」

きつぱりと言い切つた。

「あ、そう。まあ別にいいけどさ。で、何の用？」

妹のつれない態度に大して気分を害した様子もなく、ラーグはゆつたりと椅子に背をもたれかせる。イーシャは控えていた侍女に、兄妹の分のお茶を出すよう指示すると、ラナスフィアをソファーに座らせ、自分はラーグの後ろに控えた。

ソファーに座った王女は、体を斜めに据えて兄を見やり、その後ろにはイーシャと同じようにティルガが控える。まもなく、お茶を持つて侍女が帰ってきたが、彼女は全ての準備を終えると、そそくと逃げるようすに部屋をでていってしまった。その姿が扉に消えて、しばらくしてからラナスフィアは口を開いた。

「お話とこいつのは、昨日のことです」

「昨日？」

「ええ。昨日はよくも、わたくしを騙してくださいました」「誰だって、咄嗟に気が回らないって事はよくある事だよ、フィア」「それをお兄様の口から聞かれる筋合いはないですわ・・・」

「こりやかに見当違いの言葉を言つてラーグに、妹は頭を押さえて苦い声で返し、ティルガは無言で頷き、イーシャは、苦い顔をしている。

「・・・もういいです。それで本題はここからですの。昨日あつた件は、全てティルガから聞きましたわ。

お兄様は、ルシアに、研修地へ行つていた間の噂を、彼女には関係ないとおっしゃったそうですね？」

「やうだけど？」

「氣をとらなおして、再び鋭い声で詰問を始める妹を、ラーグは不思議そうに見やると、それに肯定を返す。

「なぜ、そのような事をおっしゃられたのです？」

兄の返答を聞いて、妹の声が一段低くなる。それに気がついているだろうに、ラーグは反応するわけでもなく用意されたお茶を、ゆっくりと飲んだ。

「なぜって。本当にルシアには関係ないことだからね。大体もう過去の話だし」

十分にお茶を堪能しつつ、「ルシアが入れてくれるお茶の方が美味しいよね」といぼす兄に、ラナスフィアと双子は呆れた視線を向ける。

「それ、本気でおっしゃっているんですね？ ラーグ様」

イーシャが確認するように問うが、彼とて自分の主人が本気で言つている事は痛いほどにわかつていた。

しかし、日頃あれだけルシアに構つておいて、自分の女性関係を「関係ない」の一言で終わらせるとは、それはちょっと酷いのではないかだろうか？

「だつて、関係ないでしょ。僕が誰とどうじようが」

お茶のカップをソーサーに返して、ラーグはきょとんとした顔をしている。

いや、確かにルシアとラーグは恋人関係にあるわけではないから、関係ないと言えばそうだ。

だが、それではルシアがあんまりなのではないかと、ラナスフィアは声を荒げた。

「そういう問題ではないでしょ？！」

「なぜ？」

憤るラナスフィアを、ラーグは心底わからないといった風に首をかしげる。

「ラーグ様」

「なに？ テイルガ」

それまで黙りこくれていたテイルガが、指を一本指し示す。

「もしもの話ですよ？」

「うん？」

「あるコツク見習いの少年が、ルシア嬢に花を渡したとします」

「・・・うん」

「ルシア嬢がお礼を言つと、彼は照れたように笑つて彼女に『次の休みに一緒にどこかに行かないか？』と誘いをかけます」

「へえ？」

「ラーグ様、笑顔が怖いのですが？ あくまでも、もしもの話なのですよ。これは」

「失礼な奴だな。わかつてるよ。で？」

「ラーグ様は、この事をお知りになつたらどうされますか？」

「どうするつて・・・ルシアに聞くね」

話の水を向けられたラーグは、そもそも当然のようになつて言つて、それを聞いた三人は、心の中で快哉をあげた。

「ルシア嬢のことです、やはり気になるでしょう？ そうでしょう？」

「そうですわよね、ルシアの事ですものね。気になるのは当然だと

思こますわ

「ルシアが他の男と出かけるのですから、気になるのは当然だと思いますよ」

「・・・なんなのぞ」

一気に詰め寄ってきた三人に、ラーグは困惑して身を引く。

そんな事より、話の続きはどうなつたんだと田線でティルガを促すと、ティルガは空咳をしてから続きを話出した。

「セーなのですよ、ラーグ様

「どう?」

「もしラーグ様が、ルシア嬢にその件について聞いたとしたとして。『ラーグ様には関係ございませんから、お気になさらないで下さいませ』と答えられたら、どうお思いになられますか?」

「ルシアの口真似、上手いね」

「お褒めの言葉はありがたく頂戴します。しかし、今の注田はそこではないのですが・・・」

ラーグの発言に、いささか脱力感を漂わせながらも、ティルガは追求の手を緩めない。

ここからが肝心なのだ。ラーグがルシアと同じ立場に立つたと想像してみて、どう感じたか。口で上手く説明できることならば、自分で考えさせてみればいいのだ。

ラナスフィアもイーシャもそう思つたからこそ、この場をティルガに任せている。

さあ、考えてください。ラーグ様。

妹と乳兄弟からの熱烈な視線に、ラーグは多少戸惑つたものの、首をかしげてしばし考え込むと、

「別にどうもしないね」

表情も変えずに、あっさりと答えた。

「は？・・・どうもされないので？」

「うん。実際ルシアがどうしようと、それはルシアの問題であつて僕のじゃないからね。関係がないって言われたら、それまでかな」

ルシアに嫌われたくないし、と言いながらラーグはカップを手にとり紅茶を飲む。

いやいや、ちょっと待て？ そういう問題か？ 最初からそういう問題なのか？

あまりにも平然とラーグがそう言つものだから、ティルガまでが混乱していく。

「ちょっとお待ちくださいますか？ ラーグ様」

混乱してきたティルガはそう言つと、「集合！」と声をかけて、王女と兄を部屋の片隅に集める。ラーグの言葉に同じく愕然とした二人は、素早く部屋の隅に集まってきた。

「ちょっと！ テイルガ！ どうなつているの？ お兄様、全然わかつていらっしゃらないじゃない」

「いや、それを俺に言われましても・・・」

王女に責められるが、ティルガだつてまさかああ返してくるとは思わなかつた。普通好きな相手が、他の相手と噂になつていたら気

になるだろ？し、それを関係ないとスッパリ切られたら傷つくだろう。

「ティルガの例は悪くなかったと私は思つよ。でもラーグ様がね……」

・

「本当に気にならないのですかね？ラーグ様は」「わたくしだつたら、イーシャが他の方と噂になりでもしたら気が気じゃありませんし、それをイーシャに関係ないなんて言われようものなら死にたくなりますけど……」

そんな事を、ぼそぼそと呟くラナスファイアの様子にイーシャはぎょっとする。

「……ラナスファイア様、けしてそんな事申しませんので、早また事はなさらないで下さいね？」

「大丈夫ですわ、イーシャ！わたくし死ぬなら、あの北にある物見の塔の上から身を投げようと教えていました。あそこなら下がお花畠ですから、目にも優しいですわ」

「いえ、そうではなくてですね？ラナスファイア様？私の言葉が聞こえていらっしゃいますか？大体目に優しいってなんですか？」

「ラナスファイア様……実は兄上にも……」

「何を嘘八百並べ立てようとしている！ティルガ！」

「あのわー。いつまで待てばいいの？」

脱線していく会議は、痺れを切らしたラーグの一聲によつて中断する。

そう、今はラーグとルシアの話なのである。

しかしラーグがルシアの立場にたつて考えてみてもわからないと言われてしまえば、後はどう説明すればいいのかわからない。これは、感情の問題なのだから。

いくらルシアがラーグの言葉に傷ついているのだと叫っても、それが理解できなくては意味がない。

「ラーグ様、本っ当に、気にならないのですか？ルシア嬢のことなのに？」

「僕には関係ないからね」

「そうですが・・・」

これ以上言つても、堂々巡りになるだけだ。そこはかとなく疲れを感じて、三人は頃垂れた。

「お兄様つて昔から歪んでましたものね・・・」

ラナスファイアが小さく呟く声に、双子はもつともだと深く頷いた。

* * *

結局、ラーグに上手く説明できないままに、仕事の時間が迫つてしまつた。

ラナスファイアは非常に残念な思いと悔しい思いを抱えたまま、ティルガを連れて、兄に退出の言葉を投げかけた。

「お兄様、もう少しこの件についてはお話したく思いますけれど、時間がきてしまつたので、これで失礼致します。また参りますから

「よくわからないけど、いつでもおいで」

生真面目な顔をしてくる妹に、ラーグはひらひらと軽く手を振る。

そしてティルガを見やつて

「あ、ティルガはちょっと待つて。聞きたい事があるから。代わりにイーシャがファイアを送つてきて」
そう言つて、ティルガを手招きする。

「はい。了解しました」

「まあ！イーシャ。お部屋まで一緒に来てくれるの？」

「そんな手離しで喜ばれると、俺の立場がないのですが……」

楽しそうにイーシャにエスコートされて出て行くラナスファイアに、ティルガは胡乱な眼差しを送ると、渋々といった様子でラーグの側へやつってきた。

「何の御用ですか？」

「さつきの話の見習いは誰？」

その場が静寂に包まれた。

「もしもの話と言つたでしょ？ラーグ様は心配性ですねえ」

ティルガは、にこやかに答えた。ラーグは手元のカップの縁をなぞりながら、乳兄弟を見上げる。

「もしも……ね。で、それは一割の真実なのかな。それとも違うのかな？」

「……もしも、そんな事があったとしたら……という仮定のお話ですよ？」

ラーグは、その答えに青の瞳を細めると、

「ふーん。まあ、どうちでもいいけど」

全員辞めてもうれば、後腐れないしね。

「元を軽くあげて、楽しそうに呟いた。

「それは非常に困る事になると思っていますけどねえ・・・」

田を細めたまま、王子は答えない。

教えなければ、厨房に勤める者全員を辞めさせると言われて、ティルガは大きく溜息をつくと、白旗を上げた。

「わーかりました！ そうですよ、わたくしのは一割の真実ですよ。でももうその男には、暇を取れてやりましたから」心配なく！

後ろ髪をかきながら、なかば投げやりにそう言つてティルガに、ラーグは真っ直ぐに視線を向ける。

「本当に？」

「ええ。あの男はルシア嬢のためにはなりませんからね。さりげない理由をでつちあげて追い出しました」

その言葉に視線をはずし、「そう」ただけ静かに呟く王子を、ティルガは油断なく見据えた。

ラーグはルシアに近づく男を嫌う。それはルシアが好きだから、誰にもとられたくないと思うからだろ？

その気持ちはわかる。ティルガだって、好きな女に近づく害虫は

消してしまいたいと思つ。

では、なぜ先程の話では、あつさつと引き下がる？

言い寄つた男を追放したいと思う程に執着しているくせに、『自分には関係ないと言われたらそれまで』などと言えるのか？

『お兄様つて昔から歪んでましたものね・・・』

先程の王女の言葉が耳に蘇る。

執着しているのに、突き放す。
突き放すのに、執着する。

この王子様は、一体何がしたいのか。

つい自分の考えに没頭してしまったティルガは、不意に間近にラーゲの顔がある事に気がつきのけぞつた。

「ねえティルガ」

彼の顔を覗き込むよじにして、王子は笑う。

「とりあえず、今のがお得意の嘘だつたら、お前は三ヶ月間、訓練場勤務だからね？あ、後、僕に黙つてた罰で半年ほど訓練場勤務ね？

「本當ですつて！天龍に誓つて本當ですつて！勘弁してくださいよ！大体黙つていたつて言つたつて、ルシア嬢は全く相手にしていませんでしたから、報告する必要はないと思ったのですよ！」

「独断専行反対。報告・連絡・相談は徹底しないと、いくら強固な

絆があつても脆く崩れちゃうもんだよ？

いつそんな強固な絆を築いた？！

先程よりも、更に楽しげに微笑むラーグに、ティルガはげんなりする。

「本当勘弁してくださいよ！」

結局、それから三日間、ティルガは訓練場に缶詰にされたのだった。

もしラーグ様がルシア嬢と決定的にこじれたとしたって、俺はもう知らん！

と、ティルガが思ったのかどうかは、誰も知らない。

妹、強襲（後書き）

御覧くださいありがとうございます！
イーシャに送つてもらつた王女様は、その後ウキウキだつたそつた。

ティルガの災難

その日、ルシアが王女の部屋へ入ると、やけに王女は「機嫌であつた。

「姫様、今日はとても」機嫌が麗しいようですね。何かいい事でもございましたか？」

いつも華やかな王女の雰囲気がさらに華やかになつていて、見ていくうちにも何やら浮かれそうになつてくるほどだ。

「ああ、ルシア。そうなの。とってもいい事なのよ」

弾んだ声で返してくるラナスファイアの様子に、「さてはこれはイーシャ様が何かおっしゃったのかなあ」とルシアは考える。いつだって、この王女の機嫌を左右するのはイーシャの存在なのだ。今回もきっと彼が関係しているのだろう。

そう当たりをつけたと、ルシアはふと違和感に襲われた。
部屋の主とは違つて、いつもと全く変わらない王女の部屋。
を見渡してみても、特におかしな所はない。

氣のせいかしら? なにか足りないような・・・。

そういう思いながら、王女に視線をやつて、ルシアはやつと笑がつい
た。

背後靈のことは、いゝも三女の後ろには控えているテ・ルカがいた。

「姫様、ティルガ様がいらっしゃらないようですが、どうかされましたか？」

やつと不審に思った点を理解したルシアが、そう王女に問いかけた瞬間。

「遅いじゃですか！」

勢いよくルシアの背後の扉が開かれるとともに、件のティルガが飛び込むように入ってきた。

「ティルガ様？」

「俺がいない事に瞬時に気がついてくださいよ。ルシア嬢」

彼は背後を気にするようにしながら小声で非難していく。

「まあ！ティルガ！お前、逃げてきたの？」

田を丸くしているルシアと同じように、驚いていた王女が我に返つて眦をつりあげると、ティルガはそれをさらに上回る迫力をもつて彼女に迫った。

「ラナスフィア様、酷いですよ。俺がどれだけ嫌かご存知でしょう？！あんな人を使ってまで！」
「だつて仕方ないじゃないの！」
「何が仕方ないのですか！何が！」
「ええい！うるさいわ！お前は、命令された通りにすればいいのよ！」
「そんな横暴な！」

「お一方、落ち着いてくださいませー。」

そのまま言い合いを始めてしまう「人にルシアは、事情がわから
ないながらも慌てて止めに入つた。一人が言い合いをする事は珍し
くもなんともないが、今回はなぜか一人とも迫力が違うのだ。

「一体どうされたのですか？」

ルシアが交互に一人を見やると、ティルガが勢いよく話し出す。

「どうもこうもないですよ。ルシア嬢。ラナスフィア様が、俺に訓
練場に行けとおっしゃるのですよ」

「お行きになつたらいいじゃないですか？」

「ルシア嬢まで、そんな事を言つのですか！」

ティルガはそう嘆くが、護衛官が訓練場で、その腕を磨いたとし
てもおかしくもなんともない。何をそんなに嫌がる事があるとい
うのか。訓練場には、特訓大好き無茶ぶり大好きのダルガ将軍がいる
事を知らないルシアは、ティルガもサボリ癖がでたのかと呆れるば
かりだ。

「そうよー男なら黙つてお行きなさいー！」

ルシアの賛同を得て、王女は俄然声を張り上げる。が、どこかそ
の様子が不自然だった。

「姫様、どうしてそんな事をお命じになられたのです？」

今までそんなん事など命じたがないのに、なぜ突然訓練に行けな
どと言つのか。

そう聞くと、王女は目を泳がせる。

その様子は断然、怪しい。

「姫様？」

ルシアが目を細め、テイルガが苦い顔をして王女を凝視すると、王女は観念したように白状した。

「お兄様が・・・」

「ラーグ様が？」

「テイルガを三日間訓練場にやつたら、代わりにその間イーシャをよこして下さると・・・」

売った！この人、自分の護衛売っちゃいました！！

そんな感想がルシアの脳裏を横切ったが、彼女はそれを受け流して胡乱な目つきで王女を見やつてから、テイルガに視線を移す。

「何かやつたんですか？」

「やつたかやつていなかといえど、やつていないですよ。俺は無実です」

「ああ、嘘ですよね」

「この上もなく真実だというのに、なぜ？！」

「だつてテイルガ様の真実は一割なんでしょう？」

『自分でおつしやったのに、もうお忘れなんですか？』とバッサリ切つて捨てられ、テイルガはガックリと肩を落とす。

「ああ・・・もうラーグ様もルシア嬢も可愛くないですわえ・・・」

「ラーグ様と同列にしないでいただけますか？」

ルシアはテイルガに冷たい目を向けるとそつてなく言った。その様子が常とは違うことに気がついて、王女と護衛は改めて彼女を見るが、特に変わった様子は見受けられない。

「今日はいやにお兄様に冷たいのね？」

窺うように問うと、ルシアは「そんな事は「ございません」とにべもない。

ああ、やはりこれは昨日問い合わせたラーグの発言が関係しているのだろうなあと二人は視線で会話をあつた。

「失礼いたします！ラナスフィア様！」

そこへ、今度は足音も高らかに大勢の兵士が乱入してきた。

「今度は一体なんなんですか・・・」

「ティルガのお迎えよ、きっと」

「俺は行かないと申しているでしょう！」

どうして朝からこんな騒ぎになるのかと、ルシアは疲れを覚えるが、その兵士達の海を真つ一つに割つて部屋に入ってきた人物を見て顔をしかめた。

「やあ、ルシア。おはよつ、今日も可愛いね」

艶やかな黒髪を陽光に輝かせ、じごく爽やかに挨拶してくれるルシアに黙つて一礼をかえす。

「お兄様、この部屋の主はわたくしですが？」

「ここは王女の部屋なのである。王女の言つ通り、部屋の主を差し置いて侍女に挨拶しないでほしい。さらには、さりげなく手をとつて口付けようとするのは、是が非でもやめてほしい。」

そんな思いをこめてラーグを見るが、彼は有無を言わせぬ力でルシアの手をひきよせると、その甲へ軽く口付け、にっこりと微笑みかけてくる。全くもつて普段通りの彼の姿に、彼の言葉に動搖していた自分が馬鹿みたいに思えてきて少し悲しくなった。

ラーグはそのままルシアの手を握り締めたまま、妹に視線を向ける。

「おはよ、フィア。おはよ言つけど、ルシアがいるならルシアが最優先だよ。フィアだつてそうでしょう？」

今ここにマーキャはいないけど、いたら僕なんて後回しでしょう？

「こやかにわのたまつ王子に、王女は「確かに」と頷く。頷いてしまつ。

なんですか、その自分ルール！

その場にいた兄妹以外は、全員そう思つたに違いないと、ルシアは自分の掴まれた手を見ながら思つ。そつと力をこめて、ゆっくりと手を引き抜こうとするが、痛くない程度に強く捕らわれている手は取り戻せそうにない。

「ラーグ様、手を離していただけませんか？これでは仕事ができません」

「じゃあこのまま手を繋いでいるのと、抱きしめられるのと、どっち

ちがいい？僕は抱きしめる方かな

それって拒否権ないじゃないですかー…どうもどうですしお

非難するように睨むルシアだが、『機嫌な王子様には敵いそうに

もない。

「どちらもちよつと……」

「じゃあキスする？」

「ええ？！」

「お兄様！！」

跳ね上がったハードルに田を白黒させるルシアを見かねた王女が、

咎める声をだす。

ラーグは「残念」と呟くと、やつとルシアの手を離してくれた。すかさずルシアは王女の後ろに隠れ、ラーグから手が届かないであります位置に陣取る。心臓の鼓動が激しく高鳴り、彼女は胸を押された。

た。

びっくりしました。本当にびっくりしましたーあの人は本当に何でことをおっしゃるのか！

頭の中でラーグの発言がグルグルと回る。

あんな風に真正面から言われた事などなかつたので、免疫ができていなかつた。しかも気のせいであつて欲しいと切に思うが、目が笑つていなかつた気がするのだ。

彼とてこんな大勢がいる前で、本気なわけがないとは思つ。思うのだが、彼ならやりかねないという一抹の不安がある。備えあれば憂いなしとはよく言ったものだ。あの王子様に対しては、用心するにこした事はない。

そう結論づけて、真っ赤な顔と警戒の眼差しで自分から素早く離れていくルシアを、にこやかに見送つてからラーグはティルガに向き合つ。

「それで? テイルガはなんでここにいるの? お前は今日から訓練場勤務でしょ」

微笑みながら優雅に首をかしげる王子様を、ティルガは苦みばしつた顔で睨む。

「俺は嫌です」
「拒否権はなし。大体半年にしたいところを二日でいって言つてるんだから、僕の温情に感謝しなよね」

それのどこが温情なのか、ティルガにはさっぱりわからないし、わかりたくもない。わかるのは、王子様が大変楽しそうな様子であることだけだ。

「大体フイアもいいつて言つてるし」

ラーグがそう言つた瞬間、ティルガは勢いよくラナスフイアの方を向く。その目は鮮やかに「裏切り者!」と言つていた。その刺すような視線に、王女は悲しげな微笑みをたたえて言つた。

「お前とイーシャ……どちらも大切だけれど、わたくしには一人しか選べないのよ……許してちょうだい」

違う場面で聞いたなら、その美貌もあいまつて心打つ切ない台詞であつたかもしれないが、今この場で聞く限りでは、とっても腹の立つ発言にしか聞こえない。

「正直に、兄につられたのだとおっしゃつたらいいかがですか？」
「イーシャにつられました！」

早口で言いきり、これでどひーと一転して勝ち誇った笑顔を浮かべる王女に憎悪を覚えるのは、ティルガの忠誠心が足りないのだろうか？

いやいや、当然の反応だひつ。誰が許さずとも、俺が俺を許す。

「俺の人権はどうなるのですか！」
「人権？あつたつけ？そんなの」「嘘をつく権利なら与えたじやないの」「嘘をつくのに権利が？！」

兄妹の言葉に、ルシアが驚きの声をあげるが、驚く場所が間違つている。

「驚くところはそこじやないでしょールシア嬢！」

悲鳴のようなティルガの言葉に、ルシアは手で口を押さえてから「申し訳ございません」と頭を下げた。ラーグがそれを見て目を細める。ラーグの事だから、てつくり何か言われるものと思い身構えたティルガの思惑に反して、王子は何も言わなかつた。その代わりに両手を打ち叩く。それを合図に部屋にいた兵士達がティルガの周りを囲い込む。

「さあ。楽しいダルガ將軍の訓練だよ、ティルガ」

目が笑つていません！ラーグ様！

いくらティルガといえど、この人数に加えてラーグが相手では分が悪い。しかもここは王女の部屋である。へたに大暴れしてめちゃくちゃにしてしまっては後が怖い。

逃げ場を失つてしまつたティルガは、潔く諦めの溜息をついた。

「お兄様、イーシャはどこですの？」

そんな彼を尻目に王女は、ラーグに詰めよつてている。

ああ、その可愛い表情の何と憎いことか。

「ラナスフィア様は、そればかりですね・・・
『だつて三日間はわたくしのものなのよ!』

どこまで、うちの兄が好きなのだと言わんばかりのティルガの呆れ声に、王女は弾んだ声で答える。

浮かれすぎにもほどがあるだろう!

心の中で叫びながら、ティルガは部屋の外にいた兵士も加わつて大所帯になつた彼らに囲まれ、訓練場に連行されていった。その時の彼の耳には、ダルガ将軍の高らかな笑い声が響いていたという。ルシアはその後姿を、売られていく仔牛を見るような目で見送ると、大きく溜息をついた。

ティルガの災難（後書き）

お待たせしました。ティルガがイジられキャラと化しております。
多分、幼馴染ズのピリミッシュでは彼は下位ですw
お兄ちゃんにも妹にも王子にも弱いですからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4333m/>

Colorful

2010年10月10日00時24分発行